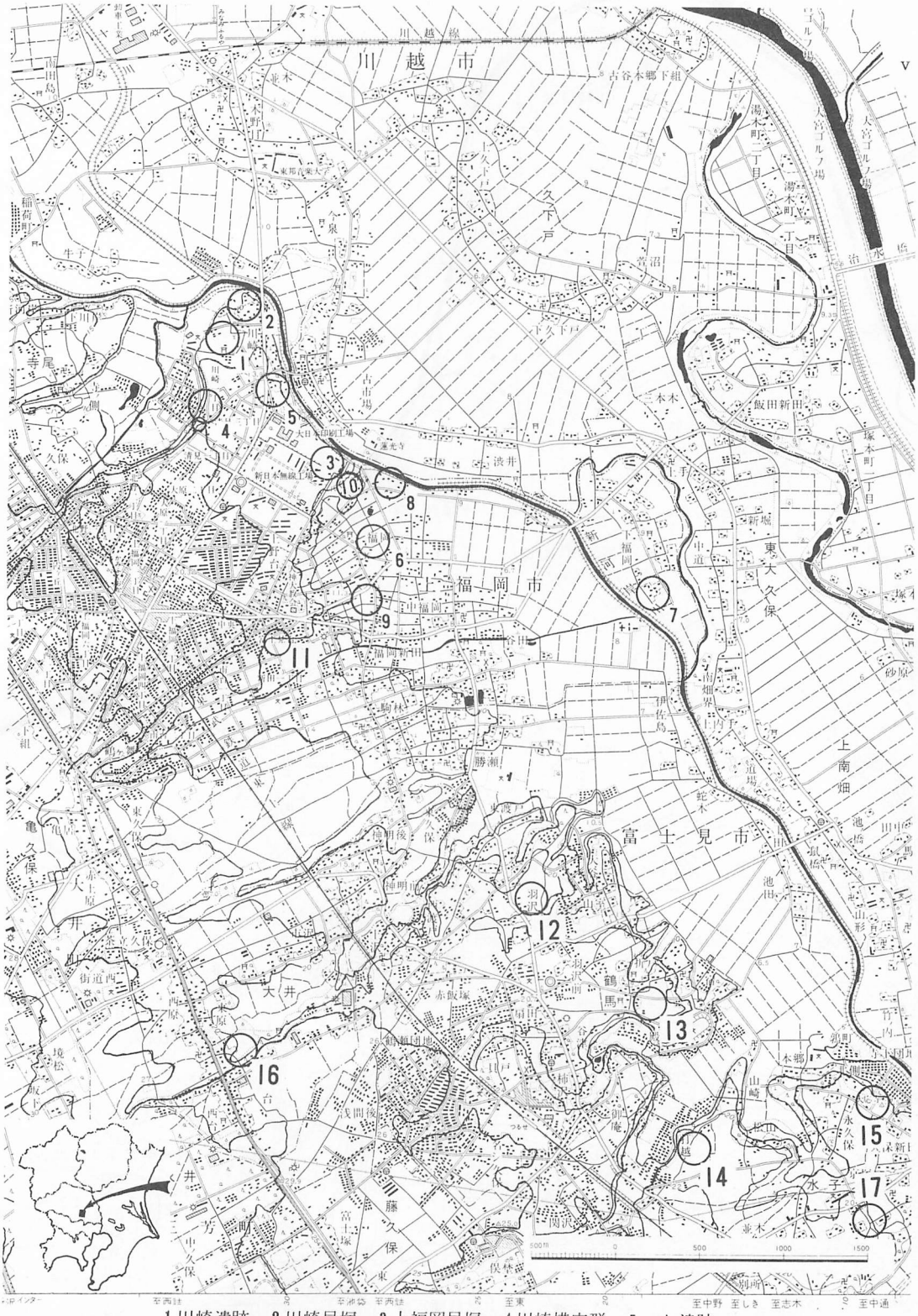


1.川崎遺跡　2.川崎貝塚　3.上福岡貝塚　4.川崎横穴群　5.ハケ遺跡　6.長宮遺跡　7.城山城跡　8.丸橋遺跡　9.松山遺跡　10.滝遺跡　11.富士見台横穴群　12.羽沢遺跡　13.黒貝戸遺跡　14.打越遺跡　15.水子大応寺前貝塚　16.大井戸跡遺跡　17.東台遺跡

第Ⅰ－1図　遺跡位置図(1)

川崎貝塚
宅地添遺跡
B・C地区
川崎遺跡
川崎横穴群
ハケ遺跡
上福岡貝塚
丸橋遺跡
滝遺跡
第4次調査区
長宮遺跡第1・2・3次調査区
長宮遺跡第4次調査区
松山遺跡
富士見台横穴群

第Ⅰ－2図　遺跡位置図(2)

Ⅰ　発掘調査に至る経過

上福岡市は、荒川の一支流である新河岸川に面する台地上に位置している。台地は、多くの開析谷によって、さまざまな地形を形成している。したがって、古来より多くの人々の活動の場となり、その足跡は数が多い。

現在、当市には約36ケ所に及ぶ多くの埋蔵文化財包蔵地が確認されている。今年度の調査によっても明らかなように、今後さらに埋蔵文化財が発見される可能性も有し、予断を許さない状況にある。しかも、当市は、東京のベッドタウンとしての様相を呈し、東京から30分圏内という位置的条件から、宅地開発が盛んに行なわれている。市教育委員会ではこれらの開発行為による埋蔵文化財の破壊に対処するため、事前に記録保存の調査を実施し、昭和49年から開発規模の大小を問わず、これを行なってきた。

本調査報告書は、昭和54年度に実施された小規模開発で、埋蔵文化財包蔵地に該当し、遺跡に影響を及ぼすと認められる開発行為に先立って行なわれた10ケ所の発掘調査報告書である。

これらの遺跡調査に至る経過は、庁内関係課との連絡調整をすることで行なった。すなわち、農業委員会事務局から農地転用許可申請段階、また建設部建設課から開発事前協議建築確認等の申請段階でそれぞれチェックされ、教育委員会に通知され、教育委員会は再度、遺跡地図と照合のうえ現地調査を実施し、遺跡の状況を確認したうえ、遺跡に影響を及ぼすとみなされる工事主体者（原因者）に連絡し、協議を行なった。その結果、教育委員会が記録保存のための発掘調査を工事主体者（原因者）から依頼され、教育委員会が発掘調査主体者となって調査を実施することになったものである。

今年度報告する10ケ所の遺跡名（調査区名）、遺跡所在地、原因者名、調査面積、調査期間は下記のとおりである。

	（遺跡名・調査区名）	（所在地）	（原因者）	（面積）	（調査期間）
1	滝遺跡第２次調査	上福岡市滝１－４－２	星野　幸裕氏	278 ㎡	４月15日～５月７日
2	長宮遺跡第５次調査	〃　長宮２－５－２	吉野　司郎氏	110 ㎡	４月16日～４月20日
3	川崎遺跡第４次調査	〃　川崎２－５－２	日出間旺子氏	304 ㎡	４月19日～５月11日
4	松山遺跡第２次調査	〃　松山２－６－７	宮寺三代松氏	161 ㎡	４月26日～５月１日
5	富士見台横穴群	〃　富士見台588－1,589	小林　精五氏	486 ㎡	７月７日～７月31日
6	ハケ遺跡Ｂ－Ⅲ地区	〃　中福岡1228－37	渡邊　健市氏	166 ㎡	７月20日～７月31日
7	松山遺跡第３次調査	〃　築地３－１－20	岡本市太郎氏	733 ㎡	８月７日～８月16日
8	川崎遺跡第５次調査	〃　川崎１－１－４	小林　慶喜氏	152 ㎡	９月26日～10月10日
9	清見遺跡	〃　清見４－３－11	長沢　　重氏	260 ㎡	11月12日～11月19日
10	川崎遺跡第６次調査	〃　川崎102－５	川口　勝弘氏	30 ㎡	12月３日～12月８日

（高木文夫）

新河岸川
丸橋遺跡
第２次調査区
丸橋遺跡
第１次調査区
滝遺跡第２次調査区
滝遺跡
第５次調査区
長宮遺跡
第３次調査区
長宮氷川神社
第１次調査区
第２次調査区
長宮遺跡
第４次調査区
松山遺跡
第３次調査区
第２次調査区
50m
0
50
100m

第Ⅰ－４図　遺跡地形図(2)

12は須恵器坏底部。色調灰白色。回転糸切りののち周辺部回転ヘラ削り。ヘラ削り面は水平でなく斜位になっている。内面立ち上り部に爪立ての角をもっている。

13は須恵器碗。周辺は回転ヘラ削り。中央部は存在しないため不明。色調暗灰色。白色針状鉱物を含む。

14は須恵器坏。色調暗灰色。白色針状鉱物を含む。口唇部は大きく外湾気味になる。やや時代が新しくなってからのものであろう。口唇部外面に重ね焼きの幅1㎝～5㎜の色調が青色に変わっている部分がある。

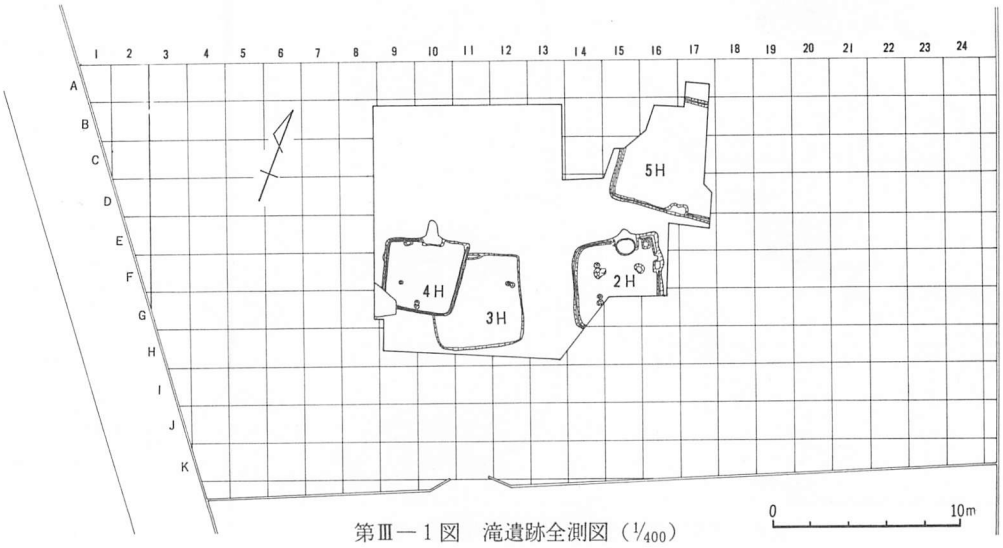
15、16は支柱、15は支柱の先端部分。15、16は同一のもので接合すると考えられるが、接合面がもろくて不十分である。16はやや下端部分が欠除しているが、風化して崩壊しているようだ。2つ合わせると高さは27～28㎝となるので、もとの形は30㎝以上のものと思われる。下方向へ幅2㎝の面とりをして11面から12面の円形をなしている。胎土は混じりものが少なく純粘土のみで焼かれているものか。

Ⅲ　滝遺跡第2次の調査

1.　遺跡の立地と調査の経過

滝遺跡は、北側は一段高い標高20ｍの台地で有名な上福岡貝塚が位置している。その台地の南側に広がる一段低い標高10ｍの台地に遺物が一帯に散布しており、昨年度の調査で古墳時代五領期の住居跡1軒を検出している。この地から東側150ｍの地点にも、丸橋遺跡として五領期の住居と鬼高期の住居を各1軒確認していたので、相当広い地区が遺跡として予想された。

今回は、北側の高地から低い台地への移行する部分に相当していた。また、今回の調査区のＡ区より北側は、昨年度地主の星野幸裕氏の母屋建設の際に試掘調査を行ない、何等遺跡を発見されていない。したがって、今回も当初遺構の確認は予想していなかったが、しかし、ちょうど、建設予定地のところに集中的に4軒の住居跡を確認したので、この遺跡の北側の限界地区になっていると思われる。



第Ⅲ－1図　滝遺跡全測図（1/400）

調査は、長宮幼稚園のプールになる部分を発掘調査地区と定めたが、しかし、その部分が曖昧なため、前回の試掘調査区を基準にした範囲をAの軸として規定した。それより南側に対してA～K、東西に1～24区を設定した。調査範囲はA～H、8～17区である。それ以外は、現在、庭の竹林が植えられている。

調査は、昭和54年4月15日に北側C、B区から急激に高くなる地であったので、表土の黒色土層の堆積が厚いと予想されたため、重機で、表土を除去した。その結果、14～16、F区に住居を確認、続いて、9～12、F区に土器片が出土したので、精査したところ、黒色土中に構築した住居であった。したがって、重機で他の部分は表土のみを除去することにした。D、9～13区に表土が30cm程しかなく浅い。現地形は急峻であるが、さらに緩く傾斜する斜面であった。

その後、C～15区に住居跡を確認した。B～C～14区は、旧母屋の「すいこみ」にあたるため、十分な調査は出来なかった。また、18～24区は、竹林として残すということであったので調査はしていない。

調査の大略は、2号住居跡が鬼高期、4、5号住居跡が国分期、3号住居跡が国分期でも9世紀後半に位置するものである。

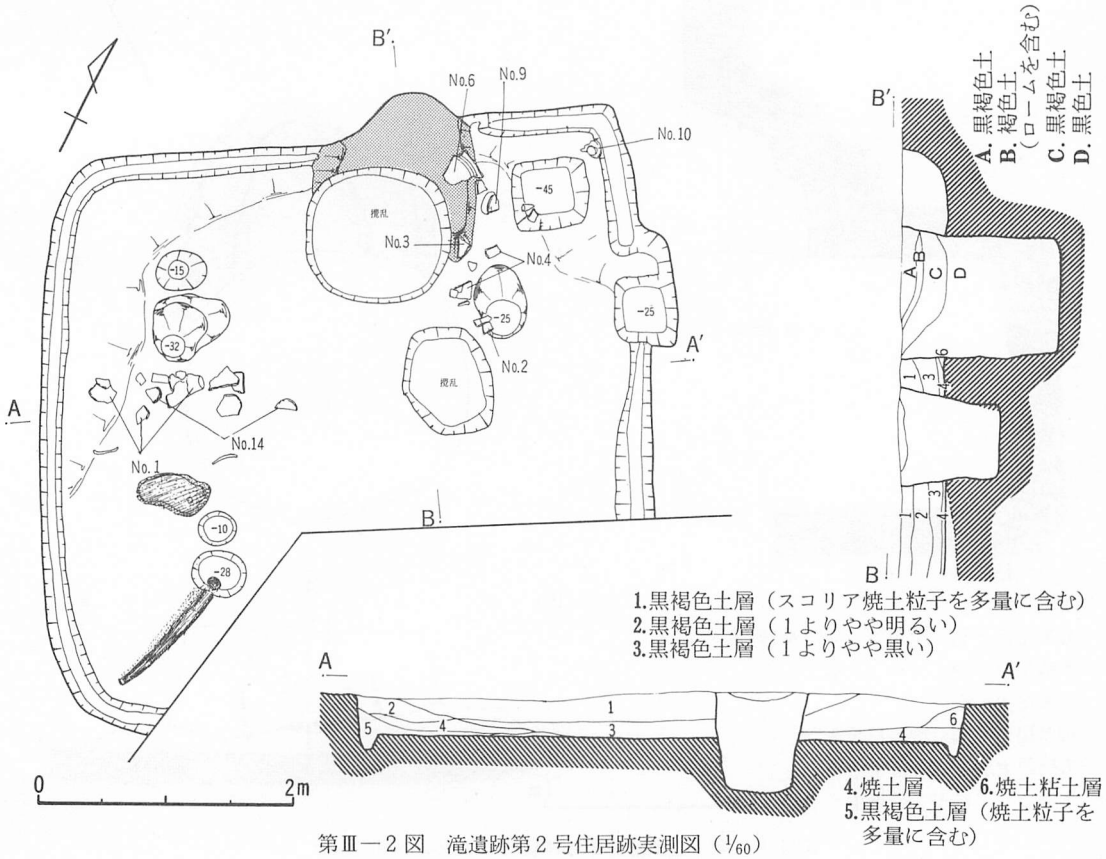
調査は、5号住居を最後に、途中雨にたたられたこともあったが、昭和54年5月7日に無事終了した。

なお、第1号住居跡は前年度調査の古墳時代初頭の五領期のものが相当する。

2. 住居跡と出土遺物

○第2号住居跡（第Ⅲ－2図，第Ⅲ－3図）

火災を受けた住居である。南北4m70東西4m60（推定）のほぼ正方形になる。壁は崩壊が少なく良好に立ち



第Ⅲ－2図　滝遺跡第2号住居跡実測図（1/60）

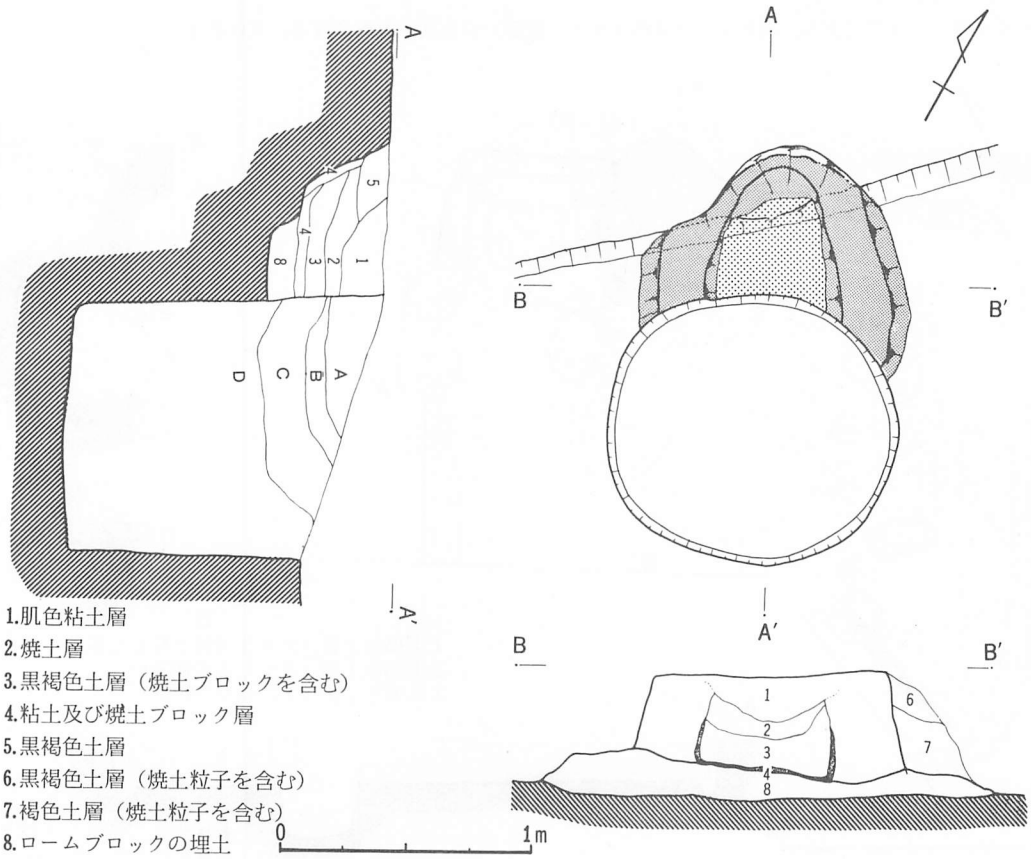
上る。周溝はカマド部分を除いて全周する。北側隅は直角であるが、他2隅は丸味を帯びている。住居南側半分は黒色土中に床面を形成している。

中央に2ケ後世の新しい土拡が掘られていて、一部カマドも破壊されていた。貯蔵穴はカマド脇に備えられ、深さ43〜45cmで、底面は水平面を呈する方形である。北東側辺の一部は20cm程壁外に突出し、その直下に床面より25cmの深さで方形状のピットがあった。中からは遺物の出土はない。この住居に伴うものであることは疑いない。その他に住居の柱穴が3本確認され、深さ（－25，－32，－28）と　ほぼ一定している。－28cmの深さのものには、周辺に一条に倒れて炭粉化した柱の一部が発見された。取りあげるのが不可能なくらい粉化していたが、その一部は柱の中に埋められている形状をしていた。柱穴の壁の南側に接していたが、柱穴断面を観察したところ、床面より2〜3cmで、以下は不明となっている。土層断面によっても、ほぼ黒褐色土が単純に充たされていただけであり、明瞭に柱痕が観察されていない。他に、その炭化の北方にも一部、炭粉化したワラ状の集積があった。

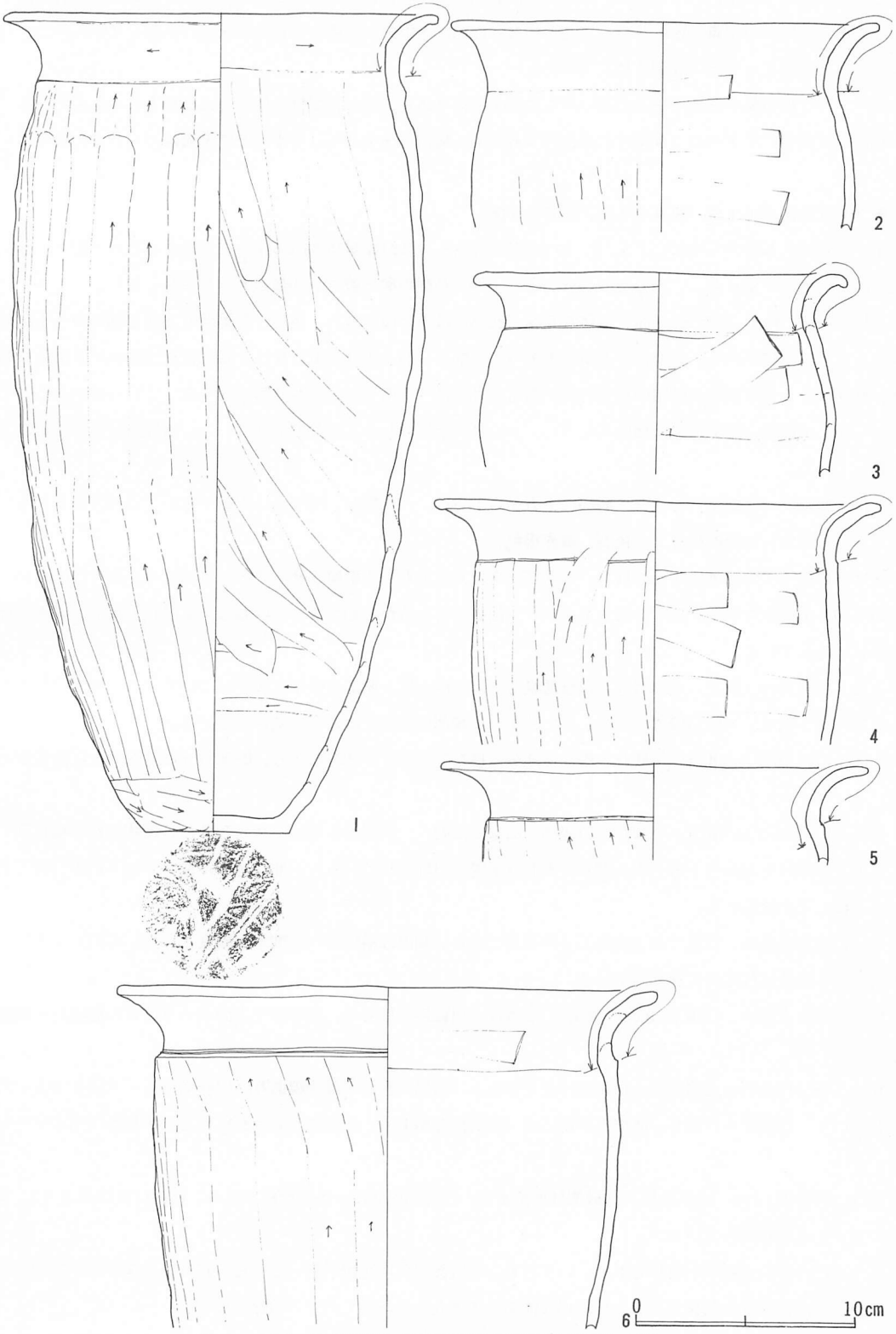
他に、柱穴の脇に深さ－15，－10cmのピットがあるが性格は不明、覆土は柱穴と変わりがない。

住居の火災の状態は、北東側が床面より厚さ10〜15cmの焼土によって覆われ、南西側が黒色土層の中に焼土粒子が混じり、その上層に焼土層が多量に堆積していた。

出土遺物は、№1の長甕が床面上に横倒しとなっていた。№2，3，4，6の長甕はカマド上面から床面近くに流れ込むように出土している。№2は床面より3cm浮いている。№6は床面より35cmの高さである。№9，№10



第Ⅲ－3図　滝遺跡第2号住居跡カマド実測図（1/30）



第Ⅲ－4図　滝遺跡第2号住居跡出土遺物実測図(1)（1/3）

はそれぞれ床より20cm、25cm浮いている。№10は北西側より流れ込んだ状態であり、壁外の上面に置かれていたようである。№14の須恵器蓋は接合して完形になったが、床中央に位置するものは床面に密着していた。が、他の一方は床より２～３cmの間層を挟んでいた。

カマドは、煙道部を壁外へ壁の上面のみを約20cm程掘り込み、他の大部分は住居内に構築されるものである。両袖部は灰白色の粘土のみで構築される良好なもので、幅約11cmを計る。第４層の焼土層はバリバリに焼けていた。

○第２号住居跡出土土器（第Ⅲ－４図，第Ⅲ－５図）

出土土器はそれ程多くはない。１，９，10が完形に近い。1は口縁部高さ10cm程$\frac{1}{2}$を欠除するのみで胴下半は完全である。他はいずれも、$\frac{1}{3}$～$\frac{1}{4}$程の残存である。他に長甕の胴部破片が10数点あるが接合しない。

１は口径20.3cm、器高38.2cm、底径6.5cm、底部には木葉痕がある。色調、黄褐色で底部と胴中央上半に対になるように黒斑がある。外面は下方から上方へヘラ削り、削り幅は明瞭でない。底部付近は横にヘラ削り、外面、底部より$\frac{1}{3}$程の部分に輪積の接合の段がある。外面はヘラ削りののちヘラ削り面をなでているのかも知れないが不明、内面は、底部近くは横位になでて、さらに、上方にむかってなで上げている。口縁部は大きく横なでを施している。

２は、口径20cm（推定）$\frac{1}{3}$残存。胴部は下方から上方へ、ヘラ削り。削り面は明瞭でない。内面は横位に木口状工具で横なで。口縁部横なで。色調、黄赤褐色。

３は、口径17.3cm（推定）$\frac{1}{5}$の残存。口唇部先端は丸みをもって肥厚させている。外面はヘラ削りなのだが、方向不明。削り面も不明。あるいは、ヘラ削りを消去しているかも知れない。内面は、木口状工具で、大きく横なで状に施している。

４は、口径21cm（推定）$\frac{1}{4}$の残存。口唇部横なでは、深くて、胴部との境に段差がついている。胴部は下方から上方へヘラ削り、一部口縁部まで達しているが、口縁部の横なでによって消されている。

５は、口径19.7cm（推定）$\frac{1}{3}$残存。横なで部分に横なでのえぐり込みが入り、胴部ヘラ削り部分とに段差がある。

６は、口径25.2cm（推定）$\frac{2}{5}$残存。口縁部の横なでは強く、胴部との境は、２～３条の竹管状工具で横に回している。胴部は下方から上方へヘラ削り、内面は平滑に処理されている。一部口縁部に横なでの下に木口状工具による横なでが見られる。

７は、壺形土器か。口径17cm（推定）。$\frac{1}{6}$の残存である。胴部は横位のヘラ削りが観察される。内面にも木口状工具による横位になで状に施されている。

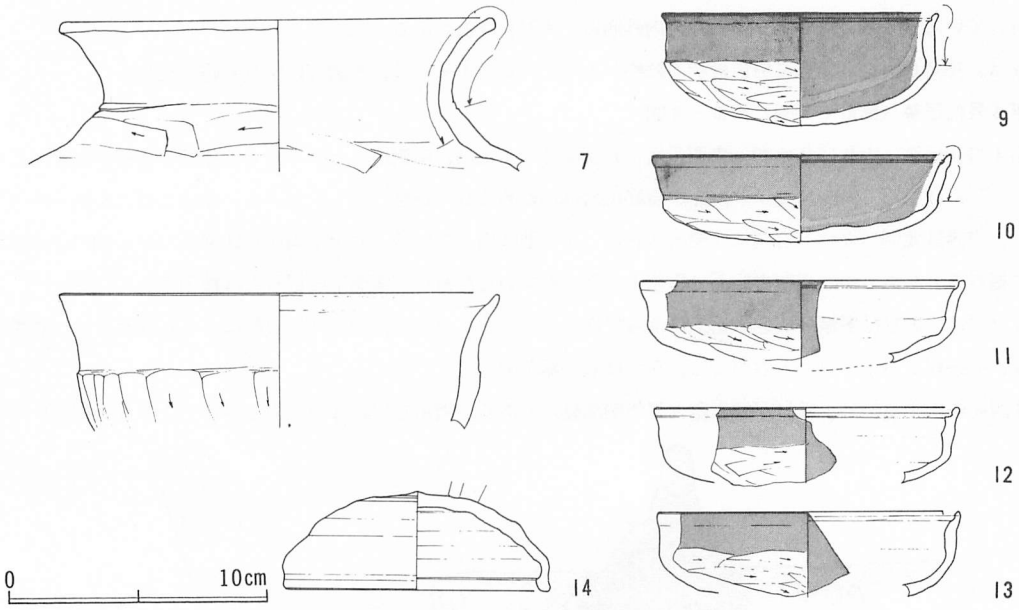
８は、鉢形土器か。口径17.3cm（推定）。$\frac{1}{5}$残存。口縁部は横なで、胴部は下方向へヘラ削りの痕跡が一部観察される。

９は、杯。口径11cm大略完形。口縁部は直立する。口唇部内面に一条沈線あり。口唇部付近・外面もゆるく外湾している。体部はヘラ削り。体部との境には一部突出部がある。内面は赤彩されているため整形は明らかでない。

10は、口径11.8cm。大略完形。口縁部は外湾する。口唇部内面に一条の沈線がある。体部は丸味をもって、突出している。赤彩されている。

・11～13は、杯形土器の小破片である。いずれも、口唇部内面に沈線が廻っている。11は口縁部はやや外湾しているが、12，13は直立気味である。12，13は体部の境は丸味を帯びていて、明瞭でない。

14は、須恵器蓋。口径10.6cm。口唇端部は内側に丸く肥厚させている。頂部は突出しているがその周囲は２回



第Ⅲ－5図　滝遺跡第2号住居跡出土遺物実測図(2)（1/3）

転した回転ヘラ削りである。外面に自然軸が全体にかかっている。したがって、身と一緒に、あるいは単独かもしれないが、正位置にして焼成されたと思われる。色調濃青色。

○第3号住居跡（第Ⅲ－6図）

当初、拡張してプランを精査した際に、2軒の重複した住居であると考えられ、カマドの有無によって4号住居跡の方が新しい時期のものと考えられた。しかし、出土土器を検討しながら掘り進めるうちに、3号住居跡の方が新しいものと判断された。土層断面図を最後まで残したが、床面のレベルがほぼ一致しているため、しかも、3号住1層と4号住3層はほぼ同一層であり、確かに重複する部分はやや黄味を帯びた土層があるので、むしろ、土層図を図示したように、出土遺物から考えて推定してみた。

3号住居跡の南側約$\frac{2}{3}$は、黒色土層中に構築されたものである。壁高は約15cmぐらいである。床面は非常に良好に踏みかためられている。一部北側に周溝があるが、第4号住居跡の床面には40cm検出されたのみで、その他には無いものと思われる。出土遺物は南東隅に僅かながら集中していた。いずれも約2～3cmの間層を挟んでいた。東側には粘土と焼土がブロックを形成していたが、カマド特有の掘り込みや燃焼部が欠除していたためカマドとは判断されなかった。しかし、他にカマドがないため何等かのカマド相当施設とも考えられる。

○第3号住居跡出土遺物（第Ⅲ－7図）

南東隅に集中して出土したのみである。

1は、「コ」の字口縁の長甕の胴部破片である。全体の$\frac{1}{2}$程であり、図示化したが、傾きや径等に若干の狂いが生じているかも知れない。胴下半に輪積の接合痕が顕著である。内面は木口状工具で横位になでられている。器表面はヘラ削りが光沢を帯びている。

2は、小形の台付甕になるもの。口径12.2cm（推定）。$\frac{1}{2}$の残存。口唇部はつまみ出すように直立している。口縁部は全体に横なでを施されているが、2ケ所の強い「押えなで」が見られる。

3は、椀形の須恵器。色調、青灰色。$\frac{1}{3}$の残存。

4，5は、須恵器でいずれも回転糸切り離しである。4は大略完形。5は$\frac{2}{3}$である。4，5は口唇部はつまみ出すように肥厚して作られている。また、ロクロ調整痕は、体部下半に顕著に見られる。4には白色針状の鉱物が含有している。5には無い。5には体部内外面に、火だすき痕がある。

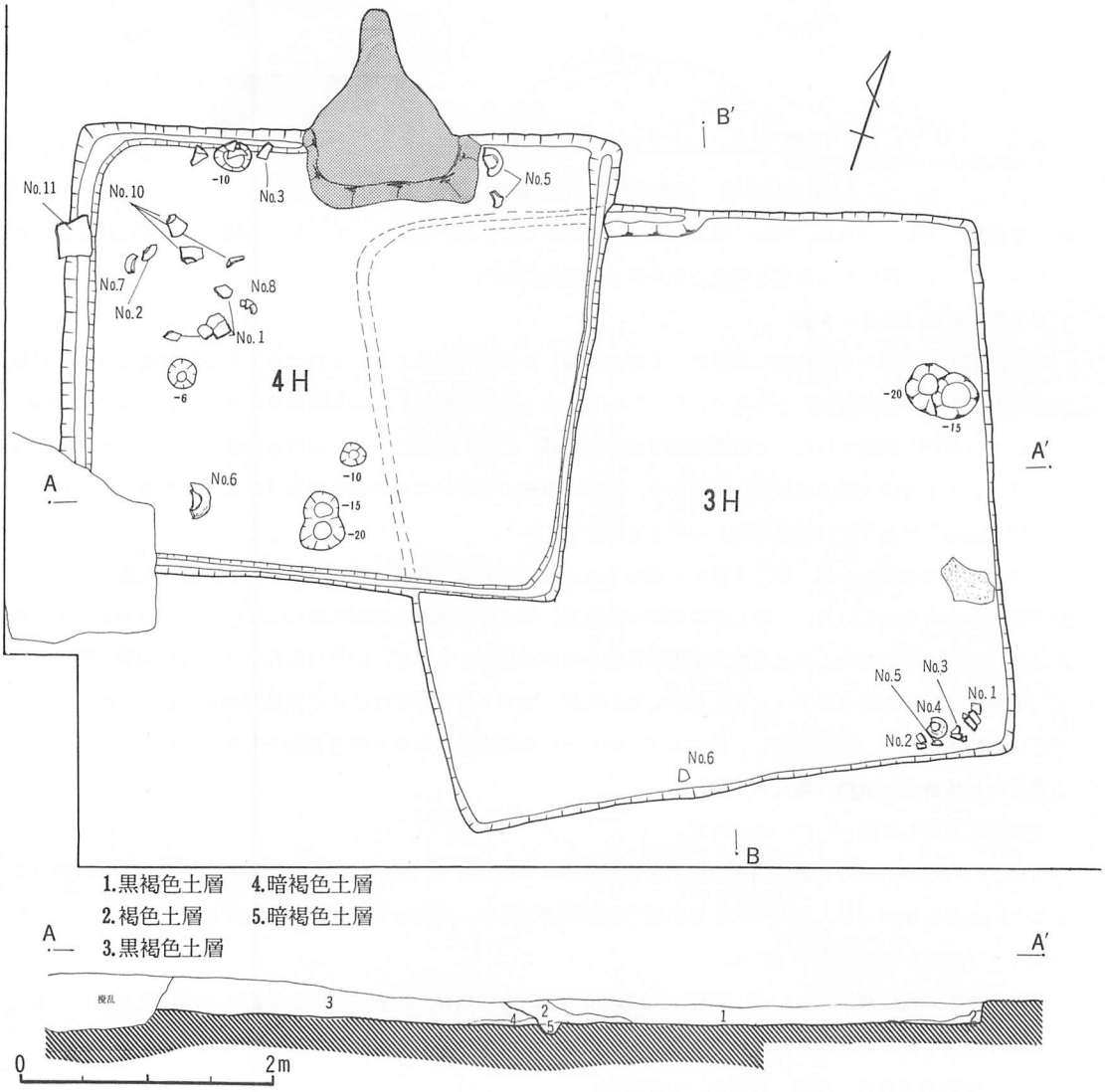
6は、須恵器皿形。胎土に白色針状の鉱物が入っている。4～6は、色調はいずれも暗灰褐色。

○第4号住居跡（第Ⅲ－6図，第Ⅲ－8図）

第4号住居跡は南北は3ｍ40、東西辺は、北側が長く4ｍ15、南側が3ｍ80である。床面は4号住居跡と同レベルで、ほぼ水平である。カマド前面が良好に踏みかためられていた。ピットは、5ケ検出されたが統一がとれない。周溝は北側のカマド右側には検出されないが、他は周っている。カマド両側の床面はローム面で、床面下の「掘り方」があるが、南側の床面は黒色土で作られているためか、床面下の掘り方は検出されていない。

カマドは、両袖は多量の灰色の粘土によって作られている。カマド両袖の外側の幅は、1ｍ10を計る。燃焼部幅は、65cm程である。カマド内からは、9の杯形土器が出土している。

住居内の出土遺物は、No.11が須恵器大甕の胴部破片である。図示していない。No.1は床面より3cm程浮いて、



第Ⅲ－6図　滝遺跡第3・4号住居跡実測図（1/60）

No.2，No.7，No.8も同様。No.3，No.5は、傾斜して壁外からなだれ込むように出土した。床面より4㎝程浮いている。No.6は、ほぼ床直である（床に密着でない）。No.10は、床より2～5㎝程浮いているが、すべて接合し西側から流れ込むような状態であった。図示した以外に土師器甕形土器の胴部破片が出土している。

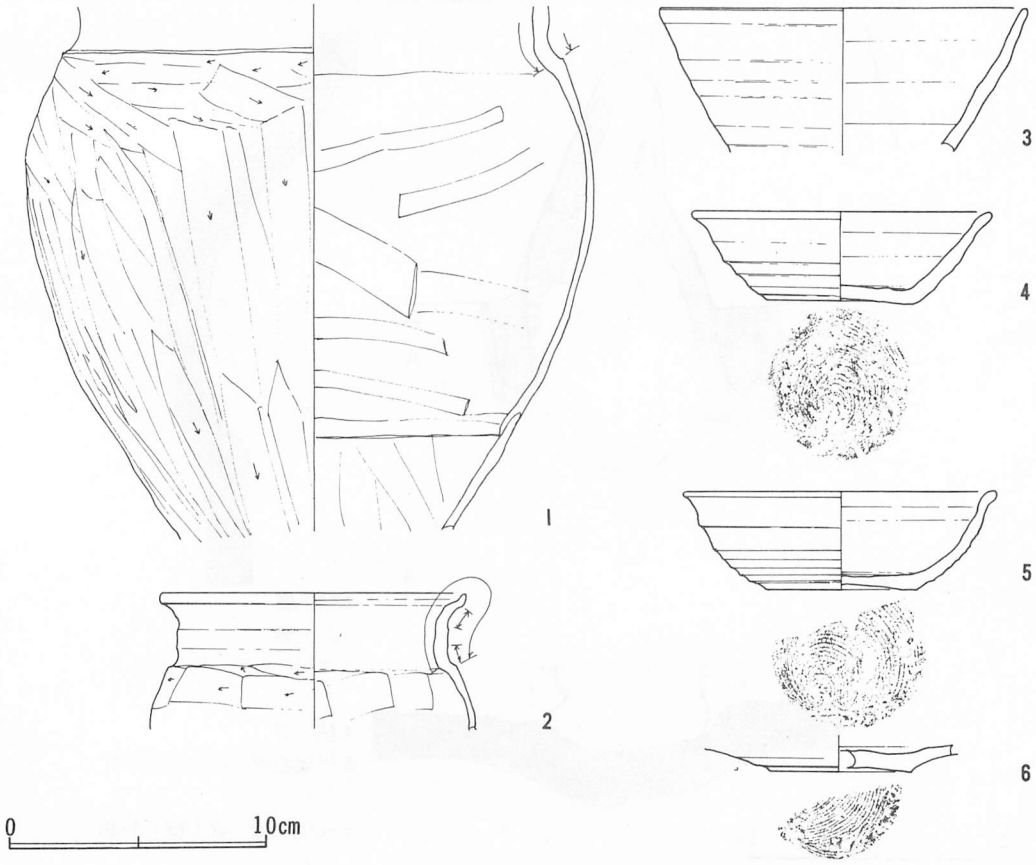
○第4号住居跡出土遺物（第Ⅲ－9図1～10）

1は、土師器壺形土器か。胴部破片しかないので、土器の傾きや大きさに若干の違いがあるかも知れない。色調、赤褐色。器表面はヘラ磨きによっている。内面は、土器の接合痕が、明瞭である。接合部は横位になでられている。そのなでの直前に、いわゆる、古墳時代五領期の「ハケ」目整形に似た調整が施されている。しかし、五領期のものに比べて極端に浅く施されている。その上半には、なで上げが観察された。

2は、土師器杯形土器。色調、黄灰色。口縁部外面、及び内面は横なで、体部下はヘラ削り。器厚は全体に厚ぼったく、口唇部は丸く整形。

3，4は、体部を大きく横位にヘラ削りするもの。3は、体部はすべて存在するが、口縁部は$\frac{1}{2}$。4は、全体に$\frac{1}{3}$のみ。3は口唇部を外湾気味。色調、赤褐色。底部は上げ底気味。4は、体部と口縁部の境に一段高い陵が付き、体部の方が厚い。口縁部は直線にひらいている。色調、赤褐色。2～4は、焼成は手に土器の粉末が付くように、一見もろそうに見える。

5～10は、須恵器である。5は、ほぼ完形。底部静止糸切りである。周縁部は幅1㎝のヘラ削りである。一部手もちヘラ削りがある。色調、灰白色。胎土には黒色の粘土が混じる。



第Ⅲ－7図　滝遺跡第3号住居跡出土遺物実測図（⅓）

6は、ほぼ完形。底部、周辺部幅2.5～3㎝の回転ヘラ削り。色調、黄褐色。外面体部下半に大きなロクロ回転によるへこみがある。

7は、$\frac{1}{3}$の現存。色調、青灰色。底部は、ロクロ粘土接合痕が突出し、それを回転ヘラ削りを2周程させて丸味をもたせている。切り離しは回転糸切り。

8は、口縁部約$\frac{1}{4}$の現存。色調、暗褐色。内面、外面ともに、ロクロ痕はなめらかである。

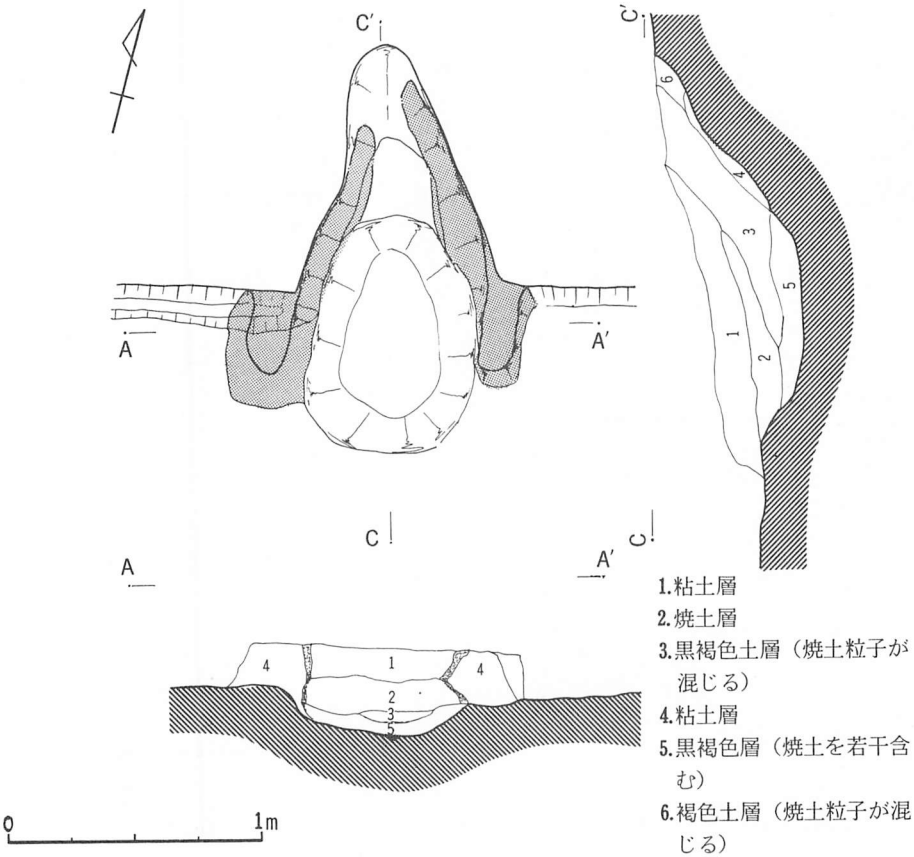
9は、口縁部$\frac{1}{2}$。カマド内より出土。色調、暗灰色。

10は、コップ状。口径9.4㎝、器高7.5㎝、底径6.5㎝。口唇部外面直下は緩いへこみがある。底部は回転ヘラ削りによる砂粒が一部見られ、外面体部下半にもヘラ削りによる砂粒の動きがあるが、これらのヘラ削りは調整形時のものと考えられる。内面の下半には、ロクロ回転による「く」の字状の突出が顕著である。外面にのみ自然釉がかかっている。口唇部から下方へ1㎝の部分にはかかっていない。内面にも自然釉が無いことから、蓋をつけてセットとして焼成されたもの。色調、灰褐色である。

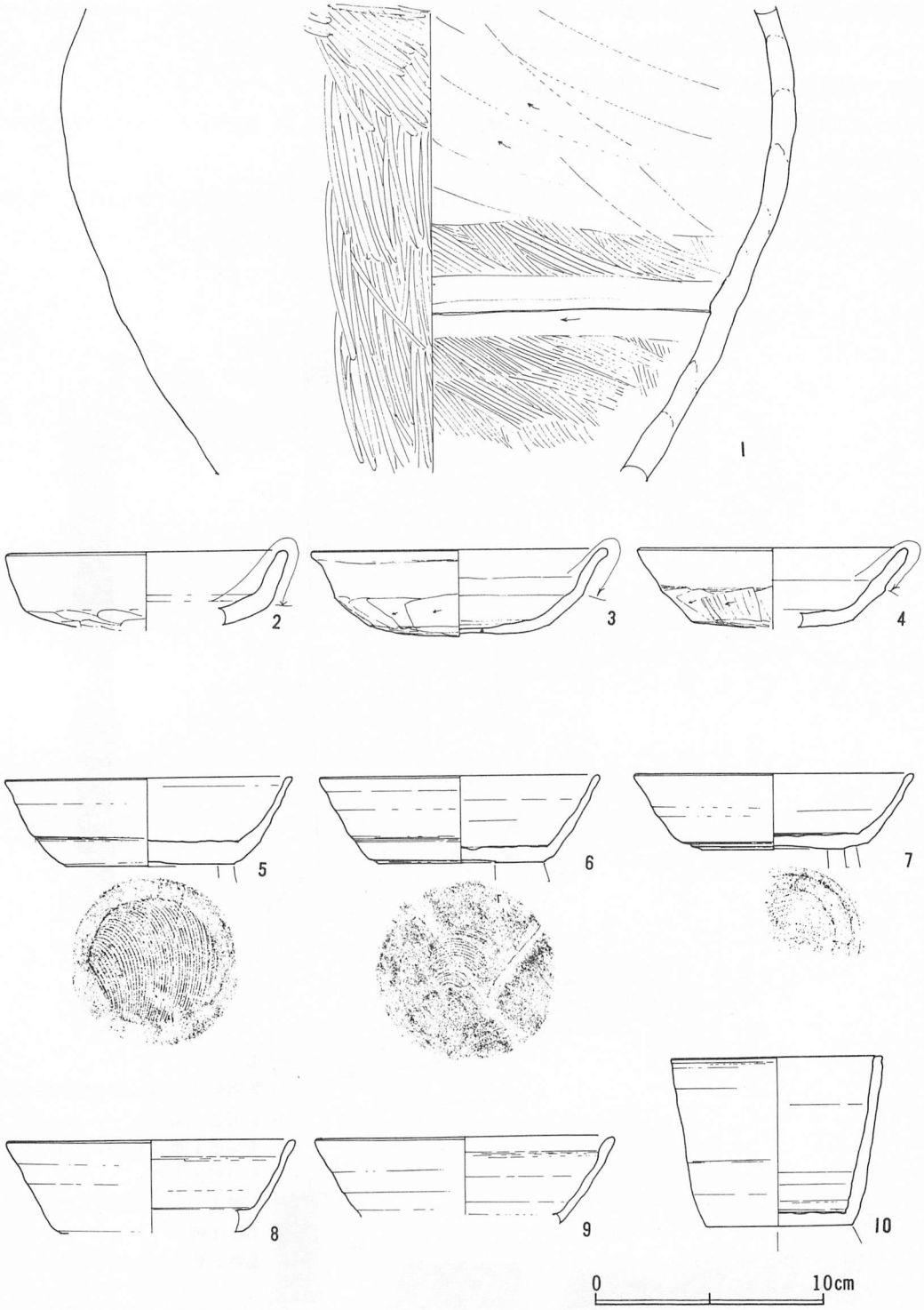
○第5号住居跡（第Ⅲ—10図）

保存地区や旧家屋のすいこみがあったため、部分的に未調査区がある。調査範囲から判断すれば、周構は全周する。また、B—B′の土層断面図において覆土中に焼土と粘土が北側から流れ込んでいるのが観察された。北側の未調査部分にカマドがあるためであろう。

南北6ｍ10の正方形の可能性がある。床面は非常に良好に踏みかためられていた。出土遺物は大部分が覆土第1層と第2層上面から出土した。第4層、第2層の下半分には殆んど出土していない。この中で、須恵器杯が最



第Ⅲ—8図　滝遺跡第4号住居跡カマド実測図（1/30）



第Ⅲ－9図　滝遺跡第4号住居跡出土土器実測図（1/3）

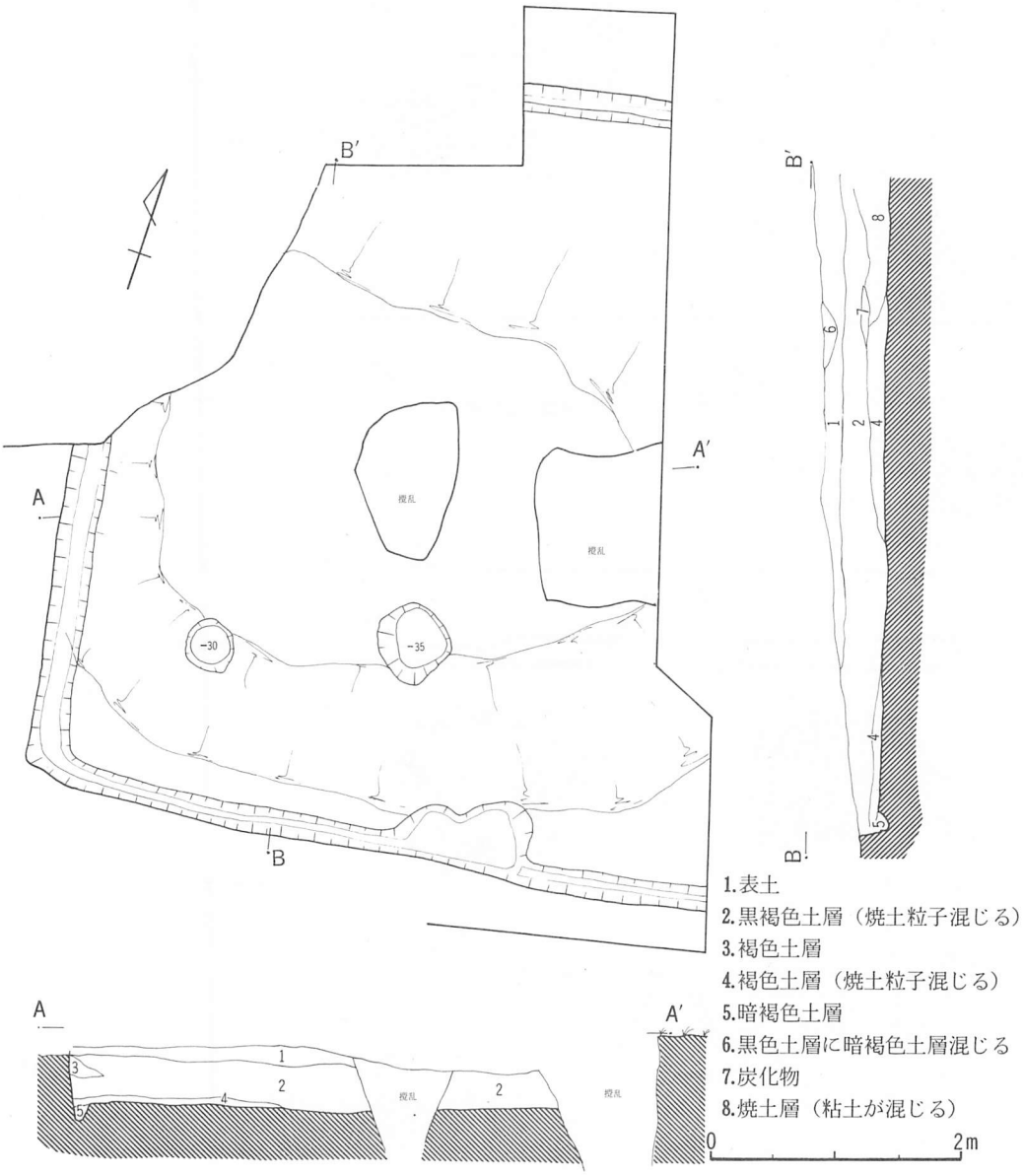
も多く、80%程を占めた。土師器長甕の胴部破片があるが、接合はしない。出土量も少なく、特に第Ⅲ－11図1，2は伴出するものか否か明らかでない。その他、第23図8も同様である。

床面精査と測量ののち、床面下を調査した結果、掘り方が南側壁直下を除いて楕円形にドーナツ状に廻っていた。ピットの深さ－30の方は床面下の調査のとき検出したものである。

○第5号住居跡出土遺物（第Ⅲ－11図～Ⅲ－15図）

出土した遺物は非常に多くの量にのぼる。土師器甕、杯、須恵器甕、杯、蓋、碗である。しかし、土師器甕は胴部破片が多く、大部分復元できない。

しかも南側に第2号住居跡があり、それの混入も考えられ、伴出関係をつかむことができない。以下、気の付いた関係のみ記していくことにする。



第Ⅲ－10図　滝遺跡第5号住居跡実測図（1/60）

1は土師器甕。$\frac{1}{4}$現存。口径22.7㎝（推定）。口縁部横なで。内面はなで上げ。胴部外面は縦方向にヘラ削りであるが、面として把握できない。2は土師器甕。$\frac{1}{3}$現存。口径18.0㎝（推定）。口縁部横なで。胴部外面は縦にヘラ削り。1，2共に口唇部先端は肥厚気味に外湾させている。

3，4はいわゆる国分期の「く」の字状口縁の土器。3は$\frac{1}{3}$現存。口径18.2㎝（推定）。胴部は横位にヘラ削り。色調赤褐色。4は$\frac{1}{3}$現存。口径19.2㎝。5は小形台付甕。$\frac{1}{2}$現存。口径14.2㎝。口縁部は5㎝程の長く直立気味である。3～5はいずれも口唇部を細くつまみ上げている。6は小形台付甕の脚の部分。大きな回転のなでがみられる。

7は土師器碗。口径12.8㎝（推定）。$\frac{1}{3}$現存。色調黄色。胎土は精練されている。口唇部外面に一条の沈線が廻る。内面は木口状工具でなで上げられている。外面は判然としない。

8は土師器坏。口径11.6㎝。$\frac{1}{3}$現存。口縁部は短かく強い横なでによっている。口唇部内面に一条の沈線が廻り、口唇部先端は非常に細くつまみ上げられている。体部はヘラ削り。内面には赤彩されている。

9は土師器坏。$\frac{1}{5}$現存。口径13.7㎝（推定）。口唇部内面に一条の細い沈線が廻る。口縁部は横なで。底部は平底に近くつくられていると考えられる。

10は土師器坏。$\frac{1}{5}$現存。口径12.8㎝（推定）。口唇部内外に沈線が廻り、口唇部先端は非常に細くつくられている。9，10は色調が類似し黒褐色を呈する。

11は土師器坏。$\frac{1}{4}$現存。口径11.8㎝（推定）。器厚は厚ぼったく16、20等に似る。胎土は精練されている。口縁部は外湾し、体部に陵を有する。体部は下方向にヘラ削りである。

12は土師器盤。$\frac{1}{5}$現存。口径14.7㎝（推定）。口唇部を内側に折っている。胎土は良好に精練され、体部は細いヘラ削りがみられる。色調黄色。

13は土師器坏。口径12.5㎝。$\frac{1}{3}$現存。胎土は良好に精練され、手に器表の胎土が粉状に付く。口縁部は直立して体部は非常に浅い。体部は横位にヘラ削り。体部内面は横なで。14も13と同様の器形で、全体の様相は非常に類似する。口径14.5㎝（推定）。$\frac{1}{4}$現存。

15～22はいわゆる相模形坏に類似するものである。この他にこの類の土器は5点程あるが破片が小さく、実測には不向きであるので割愛した。

15は、口径12.6㎝（推定）。$\frac{1}{4}$現存。口唇部直下に深い沈線が廻る。体部横ヘラ削り。削り幅は大きい。底部は平底。内面と口縁部は横なでになっている。内面は粘土紐の巻き上げによる凹凸がある。色調黄色。

16は、口径12.3㎝。$\frac{1}{2}$現存。口縁部は外湾気味につくられている。体部は横ヘラ削りで削り幅は体部全体に及んでいる。内面は平滑で、明瞭でないがおそらく横なでによるもの。色調黄赤色。

17は、口径11.9㎝。$\frac{1}{4}$現存。口縁部は外湾気味で、先端は細味。体部は横ヘラ削りで16に同じ。色調も類似。

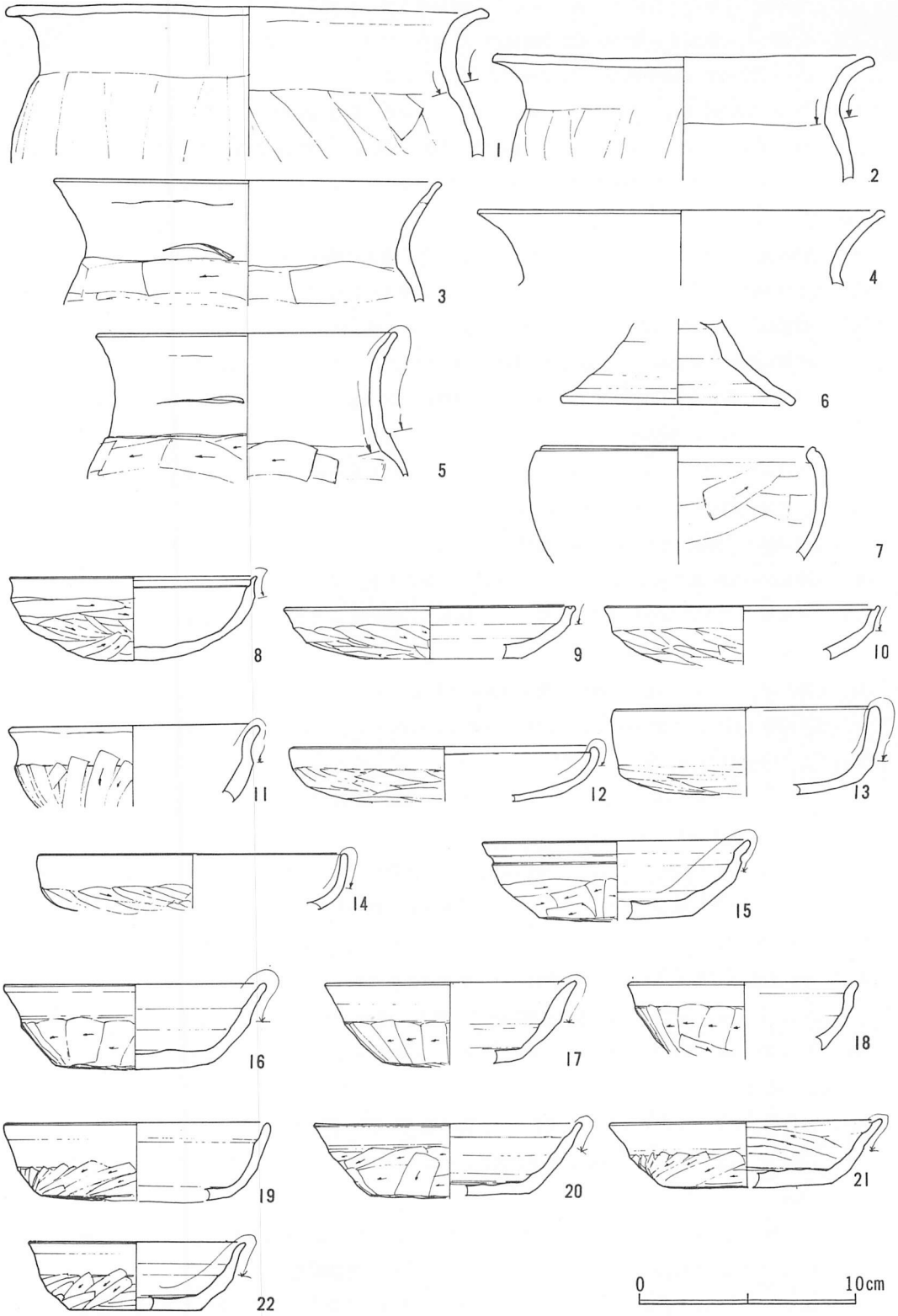
18は、口径10.8㎝（推定）。$\frac{1}{4}$現存。口縁部は短かく、口唇部先端は外湾気味に突き出ている。体部は大きくヘラ削り。内面調整は16、17と変らない。

19～22は体部下半のヘラ削りが幅狭く左下りの方向に施すもの。

19は、口径12.5㎝（推定）。$\frac{1}{4}$現存。色調赤黄色。焼成は良好で非常に堅緻。体部下半のヘラ削り幅は非常にせまく、光沢をおびている。

20は、16～18に類似する。体部下半の削り幅は16～18が一段に対して、2段にわたっているものかもしれない。口径12.8㎝。$\frac{1}{3}$現存。口唇部先端は細くつまみ上げられている。色調黄褐色。

21は、体部下半は大きく斜め左下りに施される。口径12.8㎝。$\frac{1}{3}$現存。内面に指頭による回転が顕著にらせん状に廻っている。底部内面の凹凸もらせん状に廻っている。あるいはロクロ痕による回転調整の可能性がある。



第Ⅲ－11図　滝遺跡第５号住居跡出土遺物実測図(1)（1/3）

色調黄色。胎土は良好に精練されたもの。

22は、口径 10.2 cm。$\frac{1}{3}$現存。色調黄白色で焼成は堅緻。口唇部先端は軽くつまみ上げられている。内面口縁部は横なで。体部下半は斜位に幅せまくヘラ削りである。胎土は良好に精練されている。

23から以下はすべて須恵器である。

23は甕口縁部。$\frac{1}{8}$現存。口径41cm(推定)。色調濃青色。一部内面に自然釉がかかっている。現存部分に2条の凸帯がめぐり、2本の凸帯の間に向けて、沈線が凸帯の脇にある。凸帯間に波状文が2段施される。

24は甕胴部破片。外面に平行叩き目が施される。

25〜31は蓋。25〜29には胎土に白色針状鉱物を含む。30、31にはない。

25は、つまみを欠くのみで完存。口径9 cm。口唇部のうけの部分はほぼ直角に折れている。肩部先から幅2 cmで回転ヘラ削り調整がある。外面に自然釉がかかっている。

26は、口径 12.9 cm。$\frac{1}{3}$現存。蓋の受け部端は肩部先端の角ではなくて、角を3 mm程突き出して付着させている。肩部の途中に2 cm程のヘラ削り調整部分がある。

27、28は円柱状突手部分のみ。27の突手は円柱状の上面はへこみがないのに対し、28は外面にへこみがある。

29は、$\frac{1}{4}$現存。口径 17.7 cm。外面に自然釉がかかる。

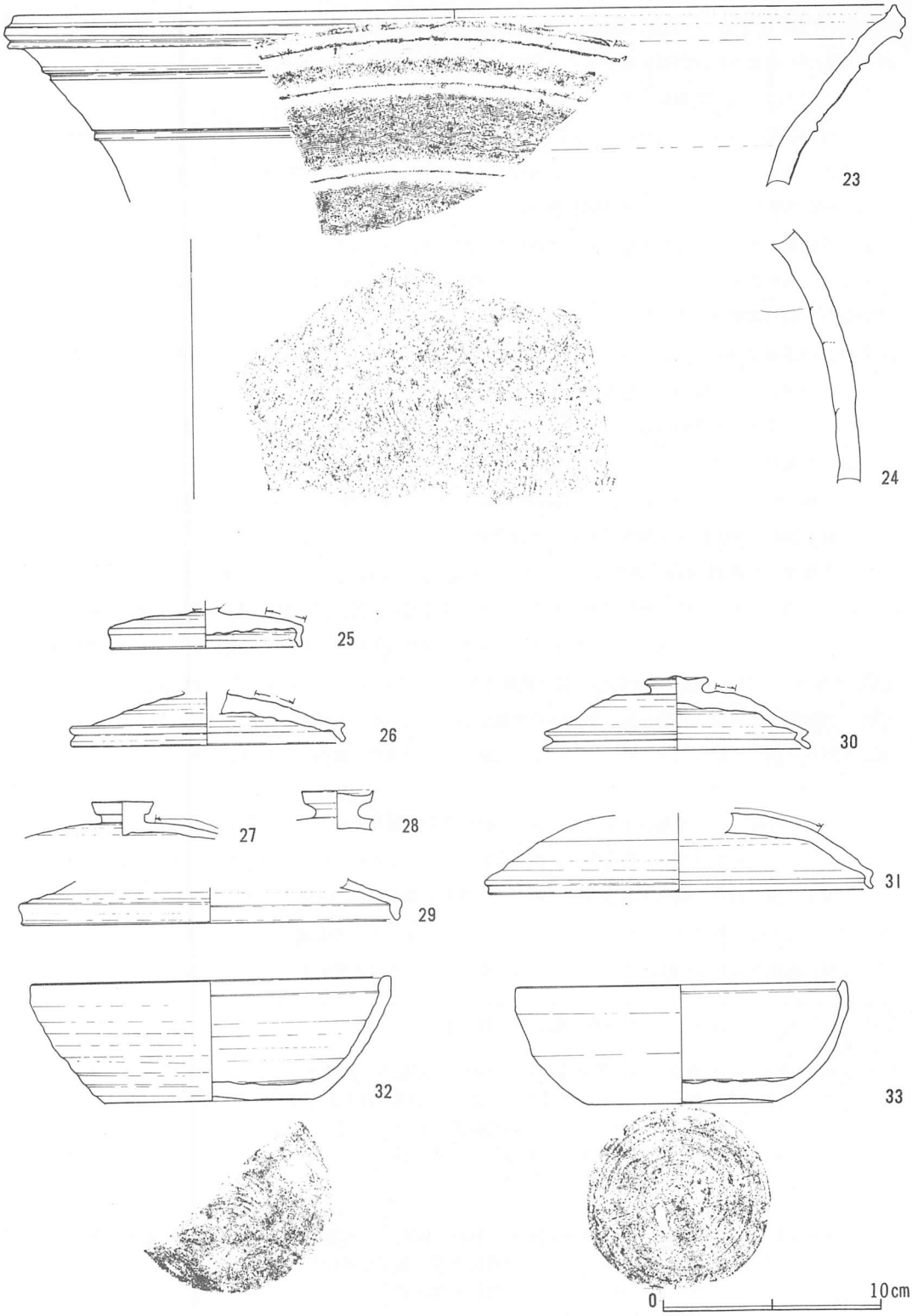
30は大略完形。口径 12.5 cm。受け部端は肩部をいったん内側に折ってから、「八」の字状に外湾させてつけている。肩上部に一部回転ヘラ削りがある。色調濃青色。

31は$\frac{2}{3}$現存。口径 17.9 cm。側面はゆるいカーブを呈し、上端部に一部回転ヘラ削りが施されている。

32、33は須恵器碗。32は白色針状鉱物を含む。33は含まない。32、33は口唇部の形態と底部内側に「爪立て技法」が存在しないことで、次に述べる坏形土器と大きく異なっている。32は口唇部内側に粘土を肥厚させている。口径 16.8 cm。$\frac{1}{2}$現存。底部は全面ヘラ削り調整に近く、中心に直径2.5 cmの円状に回転糸切り痕が残っている。33は、口縁部一部欠損の大略完形。側面に自然釉がかかっている。口唇部は肥厚させて尖端を尖らせている。底部は全面ヘラ削り。32、33はまた、底部に須恵器坏のロクロ円柱の接合の段差はまったくない。

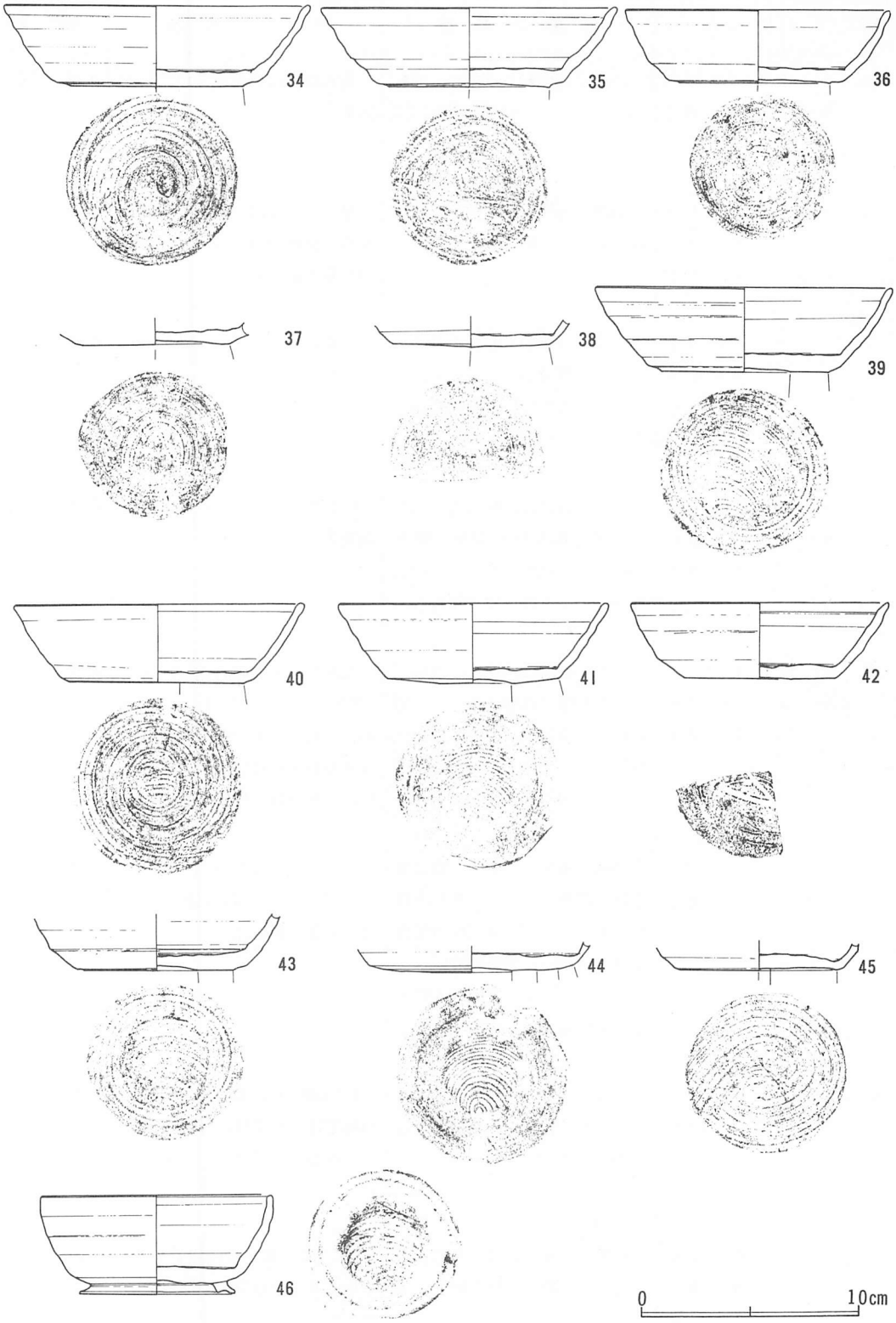
34〜70（46を除く）は須恵器坏である。34〜46は白色針状鉱物を含む　47〜70には混入していない。以下、計測値において、口縁直径をａ、器高をｂ、底部においてロクロ円柱の接合部直径をｃ、体部と底部の屈曲部直径をｄ、底部内面における屈曲部直径（いわゆる「爪立ち」部分の円の直径）をｅとして記述する。なおｃは、明瞭な段差を有しないものについては、すなわちヘラ削りによって段差を消去されているものはヘラ削りの円の直径となり、正確なロクロ円柱はこのｃの値よりも小さくなるものと思われる。

番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
34	a＝14.3　c＝ 8.0 b＝ 3.8　d＝ 9.2 e＝ 8.8	底部全面回転ヘラ削りで回転は同心円ではなく「ℓ」で1回で終了する。口唇部直下に強い押えがある。外面に火だすき痕がある。	内面に「爪立て」。へこみはほとんどないくらい弱い。	色調　暗灰色
35	a＝13.9　c＝ 7.4 b＝ 3.8　d＝ 8.8 e＝ 8.7	底部全面回転ヘラ削り。回転は同心円。内面口唇部直下に強い押えがあり、口唇部先端は尖り気味である。	内面の「爪立て」は、するどく深い。	色調　灰白色



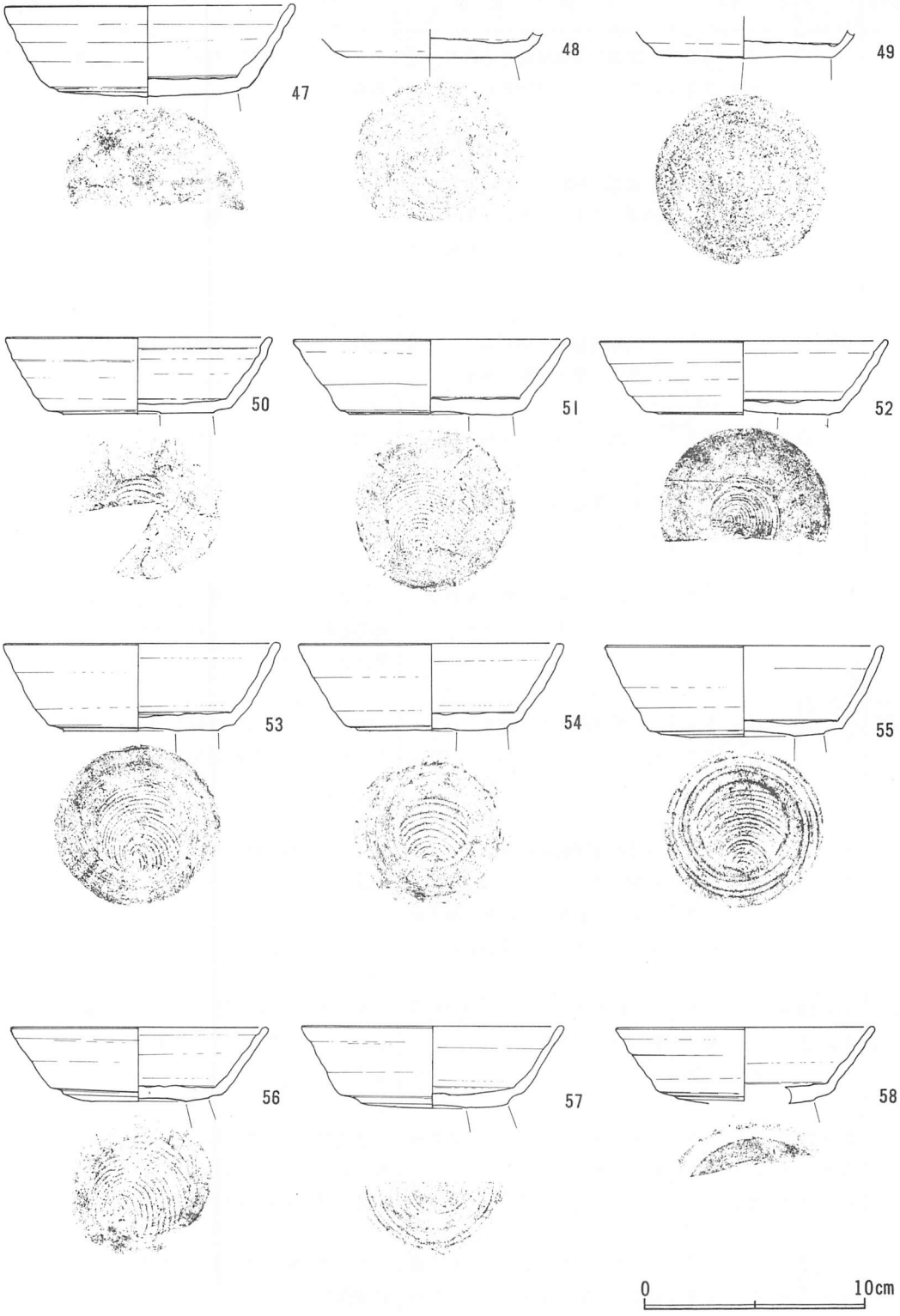
第Ⅲ－12図　滝遺跡第５号住居跡出土遺物実測図(2)（1/3）

番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
36	a＝12.3　c＝ 6.7 b＝ 3.4　d＝ 8.0 e＝ 7.8	底部全面回転ヘラ削り。回転は同心円。内面口唇部直下に強い押えがある。	重ね焼きの色調変差が口唇部にある。	色調　暗褐色
37	c＝ 6.8 d＝ 8.6 e＝ 8.3	底部全面回転ヘラ削りで回転は「ℙ」で1回で終了する。	粘土の内面は「爪立て」部分から、底部の計測の「d」の部分に割れ痕がある。	色調　暗褐色
38	c＝ 7.4 d＝不明 e＝ 8.0	「d」は不明としたように、「e」の部分からスムースに立ち上る。底部は、全面回転ヘラ削りで同心円状のもの。	内面の「爪立て」は顕著に凹んでいる。	色調　灰暗色
39	a＝13.8　c＝ 7.8 b＝ 3.8　d＝ 9.0 e＝ 8.8	完形。底部は回転糸切りののち、周辺部を削り調整。墨書「王」の字が観察される。口唇部内面、上面に強い押えがある。	口唇部外面に、重ね焼きの色調変差がある。	色調　暗灰色
40	a＝13.5　c＝ 8.0 b＝ 4.0　d＝ 8.8 e＝ 8.5	完形。底部は糸切りののち、周辺部を削り調整するもの。削り幅は3cm程で、中央に糸切り。痕跡の直径は、1.5cm程の観察である。削りは「ℙ」である。	底部の「c」の直径は、ロクロ円柱の一方が削られているため、これよりもやや小さい値になるかも知れない。口唇部内面に、一条の強い押えがある。	色調　暗灰色
41	a＝12.7　c＝不明 b＝ 3.6　d＝ 8.0 e＝ 8.0	底部は糸切りののち、周辺部の削り調整するもの。削りは斜めに施され、ロクロ円柱の接合部分がきれいに削られている。したがって「c」の値が不明となっている。	底部に鋭利な工具で「十」のカマ印がある。周辺部整形により、底部は斜位になっている。	色調　青灰色
42	a＝12.0(推定) b＝ 8.0　d＝12.6	$\frac{1}{3}$現存する。回転糸切りによる切り離し、周辺部を整調する。底部に「カマ印」がある。	口唇部内面に強い押えがあり、口唇部は尖り気味に外湾している。内面の「爪立て」は非常に弱い。	色調　暗褐色
43	c＝ 7.3 d＝ 8.0 e＝ 7.9	底部は回転糸切りののち、周辺部をヘラ削り。削り幅1.5cm。	「爪立て」部分は明瞭である。やや底部が上り気味の部分につけられている。	色調　灰褐色



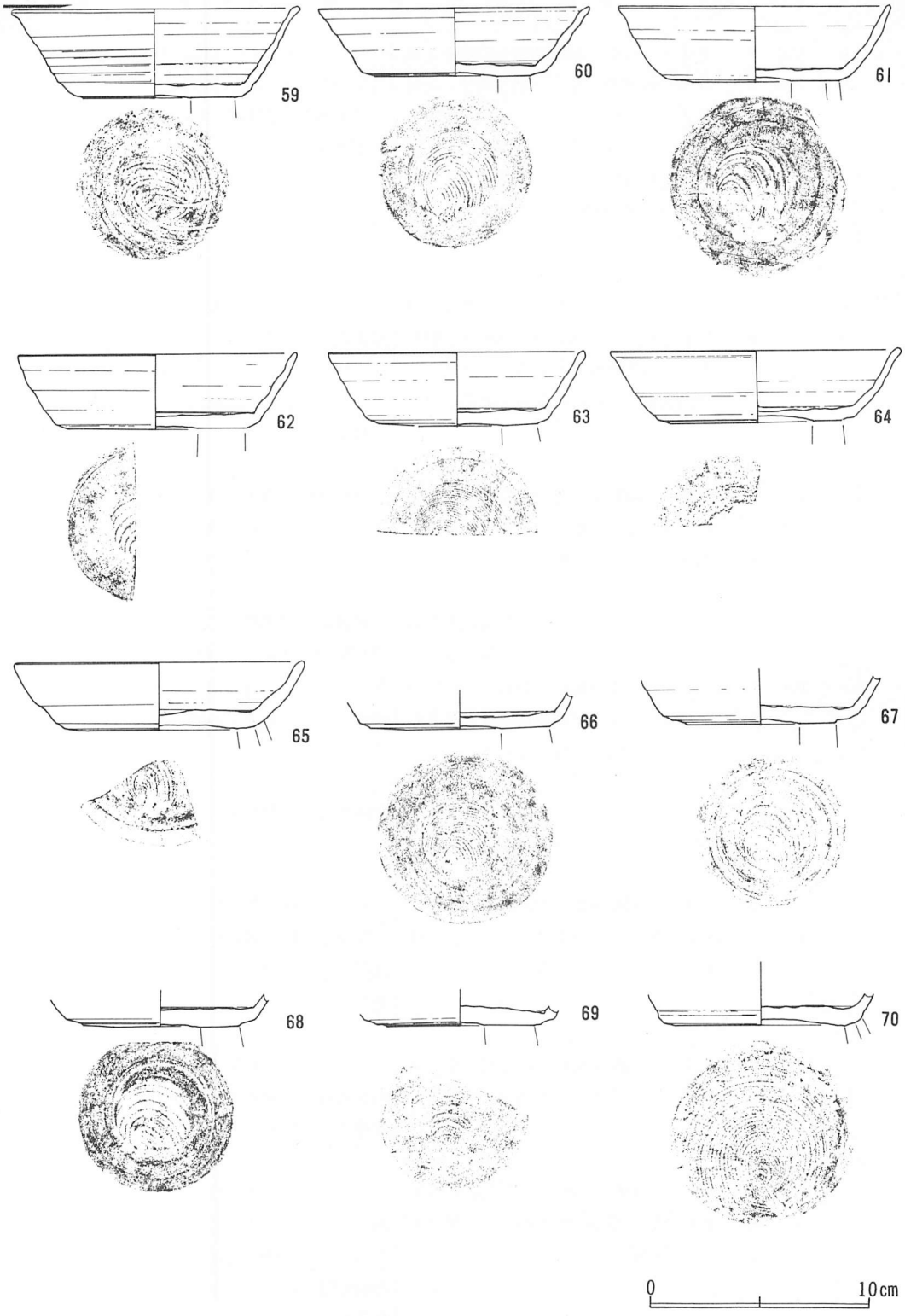
第Ⅲ－13図　滝遺跡第５号住居跡出土遺物実測図(3)（1/3）

番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
44	d＝ 8.0 e＝ 7.8	底部は回転糸切りののち、周辺部をヘラで3回転して削っている。	「爪立て」部分はなめらかである。	色調　青灰色
45	d＝ 7.9 e＝ 7.8	底部は回転糸切りののち、周辺部ヘラ削り。削りは1回による「ℓ」である。糸切り痕は僅に残る。	内面の「爪立て」は弱い。ロクロ円柱の場合は明瞭でない。	
46	a＝10.7	底部は回転糸切りののち、周辺部ヘラ削り調整を施す。	高台付底面には一条の沈線が廻る。内面に「爪立て」がある。	色調　暗褐色
47	a＝13.4　c＝ 8.2（推定） b＝ 4.2　d＝ 9.4 e＝ 8.2	底部は手持ちヘラ削り調整、「c」の値は一部残存しているための推定である。底部は弓なりに下へ凸出している。	内面の「爪立て」は鋭い。	色調　乳白色
48	c＝ 7.8 d＝ 8.7	底部は回転ヘラ削り調整で、同心円を呈す。底面は水平。	内面に「爪立て」部の陵は認められない。ロクロ円柱の接合部は認められない。	色調　青　色
49	d＝ 8.2 e＝ 8.2	底部は回転ヘラ削り。ヘラ1回によるもので、「ℓ」である。	内面の「爪立て」は鋭く凹んでいる。ロクロ円柱の接合はない。	色調　灰褐色
50	a＝12.3　c＝ 7.0 b＝ 3.4　d＝ 8.6 e＝ 8.2	底部は回転糸切りののち、周辺部手持ちヘラ削り調整である。内面の口唇部直下に強い押えがあり、一条のへこみがある。	ロクロ円柱の接合部は、明瞭に陵を呈して突出している。	色調　灰褐色
51	a＝12.9　c＝ 7.5 b＝ 3.4　d＝ 8.9 e＝ 8.2	回転糸切りののち、周辺部回転ヘラ削り調整。	内面及び外面の器面はなめらかである。「爪立て」は明瞭である。	色調　灰　色
52	a＝13.4　d＝ 8.9 b＝ 3.6　e＝ 8.3 c＝ 7.8（推定）	回転糸切りののち、周辺部回転ヘラ削り。	ロクロ円柱の接合は、円の$\frac{1}{3}$程しか判明しなく不明。他は周辺部の調整により削られている。	色調　黄　色
53	a＝12.7　c＝ 7.3 b＝ 3.6　d＝ 8.8 e＝ 8.4	完形。回転糸切りののち、周辺部を回転ヘラ削り。ヘラ削りは1回転で施すもの。ほぼ水平。	ロクロ円柱の接合部は、明瞭に突出している。	色調　灰暗色



第Ⅲ—14図　滝遺跡第５号住居跡出土遺物実測図(4)（1/3）

番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
54	a＝12.4　c＝ 7.4 b＝ 3.6　d＝ 8.3 e＝ 8.3	完形。回転糸切りののち、周辺部を回転ヘラ削り調整。回転ヘラ削りは、幅0.5～1cmで2回転程している。中央部を回転削りしたのち、外側のロクロ接合部の突出近くを回転削りしている。	ロクロ円柱の接合部は、明瞭に突出しているが、2回転しているため、底部形態はゆるいカーブを呈する。	色調　暗青色
55	a＝12.9　c＝ 7.2 b＝ 3.7　d＝ 8.8 e＝ 8.2	回転糸切りののち、周辺部回転ヘラ削り調整。回転ヘラ削りは2回転している。ヘラ削りによって斜位になっている。	ロクロ円柱の接合部は、明瞭に突出している。円面の「爪立て」は明瞭で、「U」の字状にくぼむ。外面に口唇部直下に強い押えあり。	色調　黄　色
56	a＝12.0　c＝ 6.5 b＝ 3.8　d＝ 8.3 e＝ 7.0	回転糸切りののち、周辺部を回転ヘラ削り。ケズリは斜位に施して1回転している。	口唇部外面直下に強い押えによるロクロのくぼみがある。 ロクロ円柱は明瞭である。	色調　青　色
57	a＝12.3（推定）　c＝ 6.8 d＝ 8.4 b＝ 3.6　e＝ 7.8	回転糸切りののち周辺部を回転ヘラ削り。削りは幅3mm～5mmで4回転以上施しているためロクロ円柱の接合部は丸味をもった底部となっている。	底部の周辺部整形によってロクロ接合部は丸味をもたせて調整されている。外面口唇部直下に強い押えがある。内面に「爪立て」は丸いへこみを呈する。	色調　青　色
58	a＝12.0（推定） b＝ 3.3	$\frac{1}{4}$の現存率である。器表外面は強いロクロ痕が4段ある。	全体的に57に類似する。	色調　青　色
59	a＝13.5　c＝ 7.2 b＝ 4.2　d＝ 8.6 e＝ 8.1	回転糸切りののち周辺部ヘラ削り。口唇部はやや外湾し、他の坏と著しく違う。	ロクロ調整の凹凸は体部下半に集中し、他の坏に見られない。底部の半分は黒色を呈する。黒斑か。	色調　黄褐色
60	a＝12.7　c＝ 7.1 b＝ 3.6　d＝ 8.6 e＝ 8.0	回転糸切りののち周辺部ヘラ削り調整。ヘラ削りは水平に1回転のみ。	「爪立て」は明瞭ではない。内面外面は非常に丁寧なロクロ調整をしている。	色調　灰　色
61	a＝12.7　c＝不明 b＝ 3.5　d＝ 8.6 e＝ 8.2	回転糸切りののち周辺部ヘラ削り調整。ヘラ削りは2回以上回転させている。	ロクロは内面はなめらか。外面は口唇部直下に強いおさえがある。ロクロ接合痕は2回以上の回転削りによってまったく観察されない。	色調　暗灰色



第Ⅲ－15図　滝遺跡第５号住居跡出土遺物実測図(5)（1/3）

番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
62	a＝13.0　c＝ 7.3 b＝ 3.4　d＝ 9.5 e＝ 8.4	現存$\frac{1}{2}$。回転糸切りののち、周辺部調整。周辺部調整は1回転により、水平に調整されている。	内面はなめらか。爪立て部は顕著。ロクロ円柱の接合部段差はまったく見られない。	色調　灰白色
63	a＝12.1（推定） b＝ 3.3　d＝ 8.5 c＝ 7.6　e＝ 8.2	現存口縁は$\frac{1}{6}$。回転糸切りののち周辺部ヘラ削り調整。ヘラ削りは2回以上に及ぶ。	内面は非常になめらか。ロクロ円柱接合部の段差はまったく認められない。「爪立て」は軽い。	色調　灰白色
64	a＝13.5 b＝ 3.4	全体に$\frac{1}{5}$程度の残存。回転糸切りののち周辺部ヘラ削り調整。底部中央は非常に薄くなっている。口唇部は外湾気味。	口唇部は強い押えがあり、外湾気味で他の坏類と異なる。ロクロ調整痕は体部下半に集中する。ロクロ円柱の接合部は段差がある。	色調　暗青色
65	a＝13.6 b＝ 3.2　d＝ 8.9	器高がやや低く幅1cmの周辺部のヘラ削りを2回転していて底部は丸味をもって体部に移行する。	内面に強い押えによるロクロ痕がある。「爪立て」はまったくない。	色調　暗青色
66	c＝ 8.4 d＝ 9.3 e＝ 9.1	回転糸切りののち、周辺部ヘラ削り調整。ヘラ削りは3回転以上である。	器高内面は非常になめらか。ヘラ削りは丁寧に施し、ロクロ円柱の段差は認められない。「爪立て」は鋭利なへこみがある。	色調　青　色
67	c＝ 7.0 d＝ 8.7 e＝ 8.4	回転糸切りののち、周辺部ヘラ削り。ヘラ削りは2回転以上行なっている。	ロクロ円柱の段差がある。「爪立て」は鋭利。	色調　乳灰色
68	c＝ 7.3 d＝ 8.8 e＝ 8.6	色調、胎土、回転糸切り、周辺部ヘラ削り等すべてに67に類似。	ロクロ円柱の残し方も67に類似。	色調　乳灰色
69	c＝ 6.8 d＝ 8.6 e＝ 7.6	回転糸切りののち、周辺部ヘラ削り調整。ヘラ削りは中央を凹ませて行なっている。	ヘラ削りの関係でロクロ円柱は明瞭な部分とそうでない部分がある。	色調　青　色
70	d＝ 8.8 e＝ 8.2 （？）	全面糸切りによって切り離し。幅5mmのヘラ削りを側面と底部に施す。他の78以前の坏と異なる。	内面はロクロ回転痕の凹凸を明確に残し、爪立てがなく、ゆるいカーブになっている。	色調　乳白色

◎滝遺跡第５号住居と出土遺物について

昨年度の第１次調査では、古墳時代初頭の五領期の住居跡が検出され、Ｓ字状口縁の台付甕をはじめとして多量の遺物が出土した。この住居の床面下の調査によって住居構築面＝「掘り方」の在り方から私見を得たので、住居の復元と集落について、土曜考古学研究会で発表したことがあった。

今回の調査区は、第１次調査区よりも50ｍ程北側の地点であるが、４軒の住居 ――第２号住居は７世紀代、第４・５号住居は８世紀末葉の国分期前半代、第３号住居は国分期後半代――を検出した。第５号住居の床面下は、先に示した五領期の住居の構築面と良く似ている。すなわち、壁直下に掘り方があるのではなく、壁よりも30cm程内側に掘り方が周るものである。このような例は、比較的大形の住居に見られるようであり、ほぼ、五領期から国分期まで存在することが確実である。今後多くの類例が蓄積されよう。

次に第５号住居出土の多量の土器であるが、土師器坏と須恵器坏についてふれてみたい。

土師器坏は、隣接する第２号住居からの混入すると考えられるものを除くと、体部下半に斜位にヘラ削りを施す平底の土器が注意されよう。底部破片は大きくなく、ヘラ削り方向等に不明な点が多くある。これらの坏はいわゆる相模形坏として河野氏等によって指摘されたものである。河野氏によれば、相模形と同一の手法であるが、胎土においてまったく異っているとのことである。しかし胎土の問題を別にすれば、かかる手法の坏は、当埼玉県では川越市鶴ケ丘Ｃ区第４号住居、大里郡江南村荒神脇遺跡第23号住居、埼玉県北部の児玉町電雷下遺跡第60号住居、本庄市大久保山遺跡第16―Ｂ号住居等に出土を見る坏に類似を見せている。これらの各遺構の年代は、須恵器の手法からみて、ほぼ一定の時間帯――８世紀末葉から９世紀初頭――に位置付けられよう。

これに対して、当遺跡ではいわゆる体部下半を指頭で押圧する南武蔵形坏は見い出していない。南武蔵形坏は、近隣の遺跡では、川口市安行中学校校庭等で出土しているので、今後、出土する可能性があるが、安行中学校校庭遺跡は当遺跡よりも時間的に新らしい時期のものと考えられるので、今のところ、武蔵国において北よりの地域では、相模形の手法と南武蔵形の手法は時間的差異を有していると考えておきたい。

次に須恵器は、白色針状の鉱物を含むものと、含まないものに分けることができる。数量は次のとおりである。

	蓋形	坏(埦形を含む)	甕形(口縁数)
含むもの	9	115（3…高台付）	8…（2）
含まないもの	9	314（2… 〃 ）	20…（2）

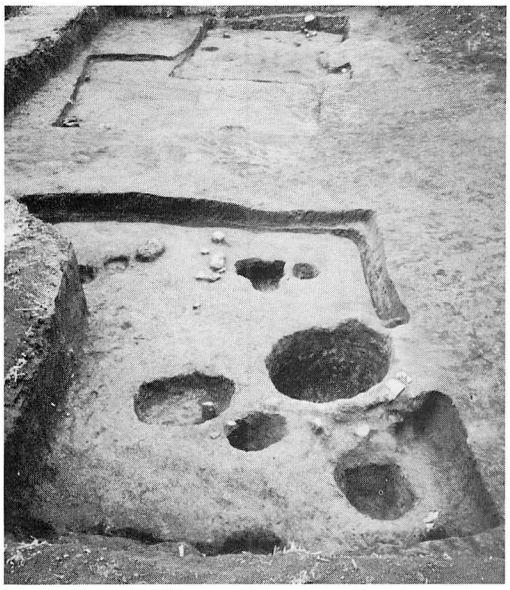
左記の数量から、蓋は主に、埦形や高台付形に組合わされ、当地で必要とされ、各生産地から一定の割合で供給されていたと推察される。

白色針状鉱物は、この時期に最も多く、これ以降急激に数量を減じる。かかる傾向は神奈川県下と一致している。以上の２者の坏の底部切り離し後の調整手法には４種ある（①全面ヘラ削り、②糸切りのち周辺部調整、③糸切りのみ、④手持ちヘラ削り）。しかし、以上の調整手法については、ロクロ粘土円柱の痕跡の消去の仕方に、大きな差異がある。すなわち、白色針状痕が含まれるものはロクロ円柱が大きく削られるものが多いが、含まれないものには、ロクロ円柱痕が段差となって大きく残るものや、２度以上の回転によってロクロ円柱痕が丸味をもっているものが多い。この違いは、25頁の土器説明の項で記したようにロクロ円柱痕より１cm程、土器底径が大きいことから生じている。前に坏形土器の製作法の復元からロクロのもつ意味まで記したことがあった（川崎第３次報告参照）が、未だ問題が内在しているので以上のことを包括して、年代論や歴史的意味を探っていきたいと考えている。

（笹森健一）

①関野克　1938「埼玉県福岡村縄文前期住居址と竪穴住居の系統に就いて」人類学雑誌53－８。他。
②和島誠一　1949「原始聚落の構成」1958「横浜市史」
③宮本長二郎　1979「日本考古学を学ぶ(2)」有斐閣
④小林達雄　1965「米島貝塚」庄和町教育委員会
⑤村田文夫　1967「関東地方における縄文前期の竪穴住居について」考古学雑誌53－３，他。
⑥塚田光　1962「栃木県藤岡貝塚の調査」考古学集刊１の４，他。
⑦吉廻純　1977　椚田遺跡群「椚田第Ｖ遺跡の調査」八王子市椚田遺跡調査会
⑧は①に同じ。　⑩は④に同じ。
⑨栗原文蔵　1977「殿山」埼玉県遺跡調査会，富士見市教育委員会
⑪笹森健一　1977「縄文時代住居址の一考察」情報２，３ 埼玉考古学会。拙稿に対して，村田文夫氏から御批判を受けた。氏に感謝すると同時に，私見は未だ変える必要がないと考えているので，反論は別の機会にしたい。

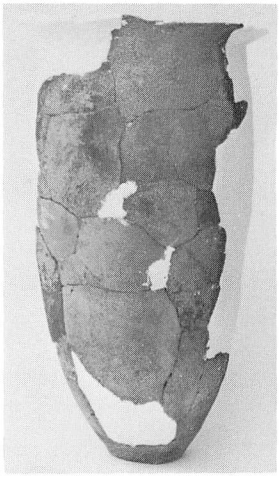
滝遺跡出土土器（番号は図面に同じ）



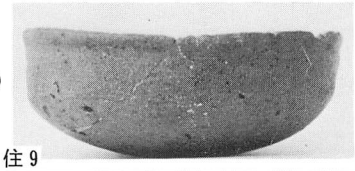
滝遺跡全景

手前第２号住居

奥第３・４号住居

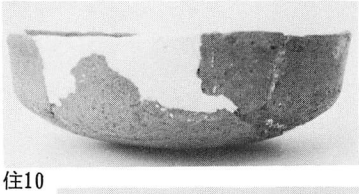


２住１

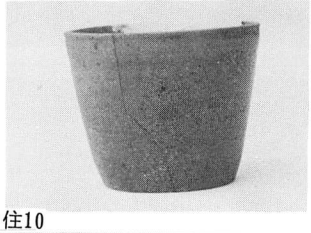


２住９

第４号住居（南より）

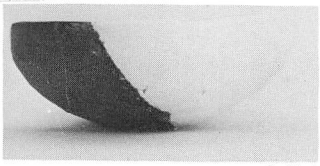


２住10

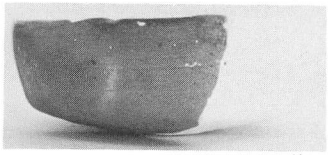


４住10

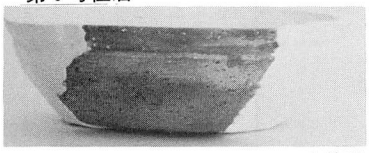
第５号住居



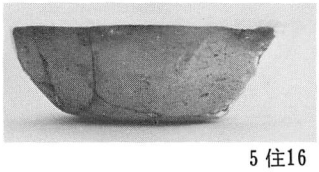
５住８



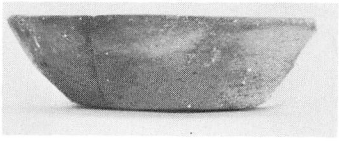
５住13



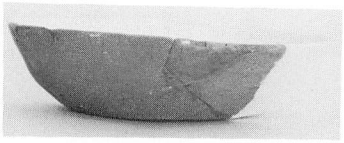
５住10

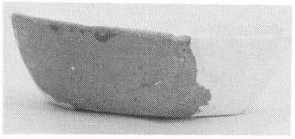


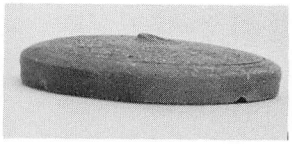
５住16

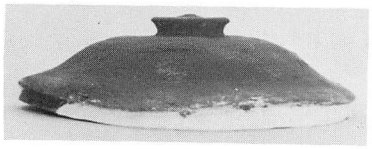


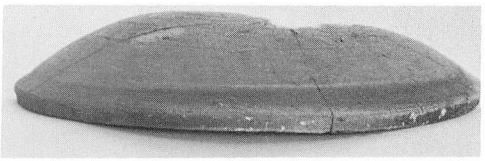
５住20

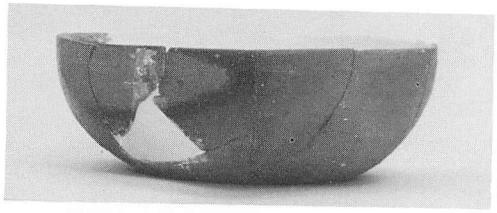

21

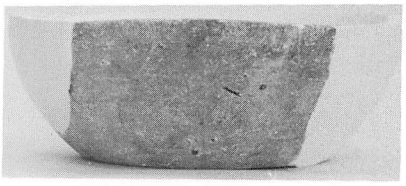

22

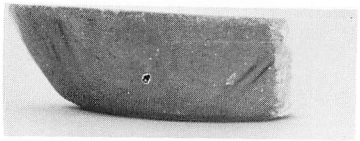

25

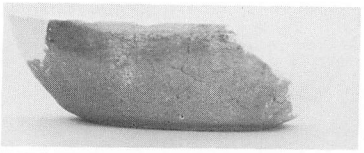

31

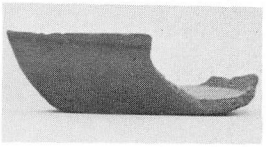

35

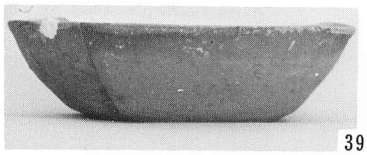

33

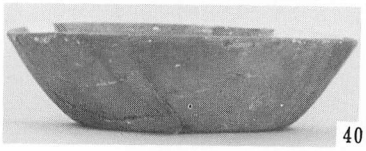

32

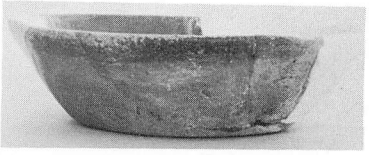

34

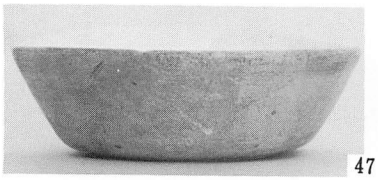

35

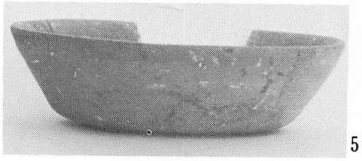

36

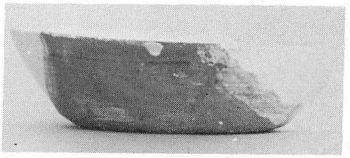

39

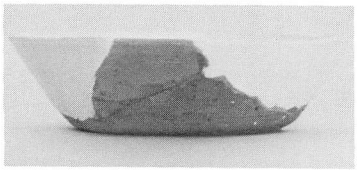

40

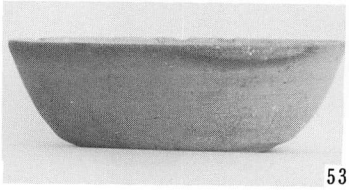

41

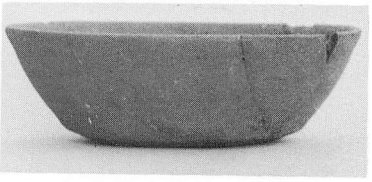

47

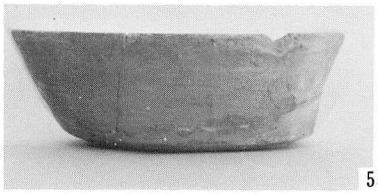

50

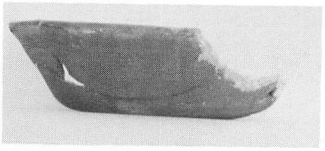

51

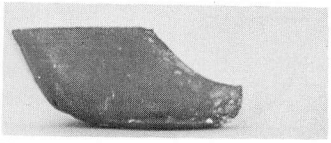

52

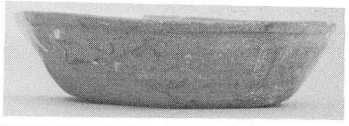

53

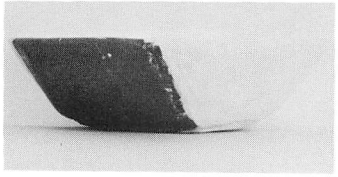

54

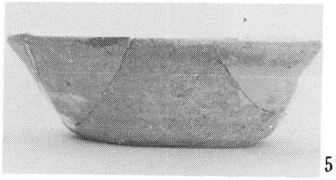

55

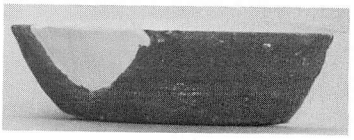

56


57


60


58


59


61

さ20～25cmに及び段をもつ。中央西寄りに双円状になる地床炉が認められ、北側のそれの方が被熱部分が厚い。また、南隅に設けられた貯蔵穴は深さ40cmの平坦な底面を有する。なお、P5は55cm、P6は20cmの深さ（文献37）。

出土の土師器（第６－11図）は前期の五領式（４世紀前半）に属する。刷毛目やヘラ削り、ヘラ磨き、指頭圧痕などによる器面調整がみられる。１～４は台付甕でＳ字状口縁をもつ。５～８は甕である。９～11・13は壺で、うち10は頸部に条線文が一周し、11は複合口縁を有する。12は坩（かん）。14・15は高坏、16・17は器台、18は台付坩でいずれも脚穿孔は３穴。19は台付甕のミニチュア、20は椀。

滝遺跡第２次２号住居跡（第６－13図）

平面形は正方形をなし、４本主柱（深さ25・32・28cmの３本＋１）の配置をとるとみられ、周溝が巡る。ただ、東壁の一部が張り出し、直下に深さ25cmの方形ピットを伴う。北壁に両袖を粘土のみで構築したカマドを付設し、その右脇に深さ45cmの方形の貯蔵穴を具える。その下部を柱穴内にも残した柱の炭化材や多量の焼土が覆土下層に遺存していたことから、火災住居と認められる（文献38）。

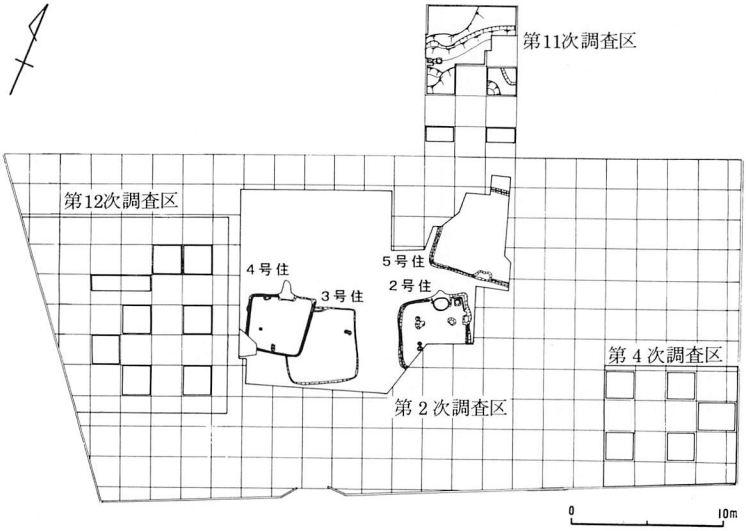
出土土器（第６－14図）は後期の鬼高式（７世紀前半）に属し、土師器のほか須恵器１点を含む。１～６は長甕、７は壺、８は鉢である。９～13は坏で、口縁部外側と内面全体に赤彩がみられる。14は須恵器蓋で、外面に自然釉がかかっている。

滝遺跡第８次９号住居跡（第６－15図）

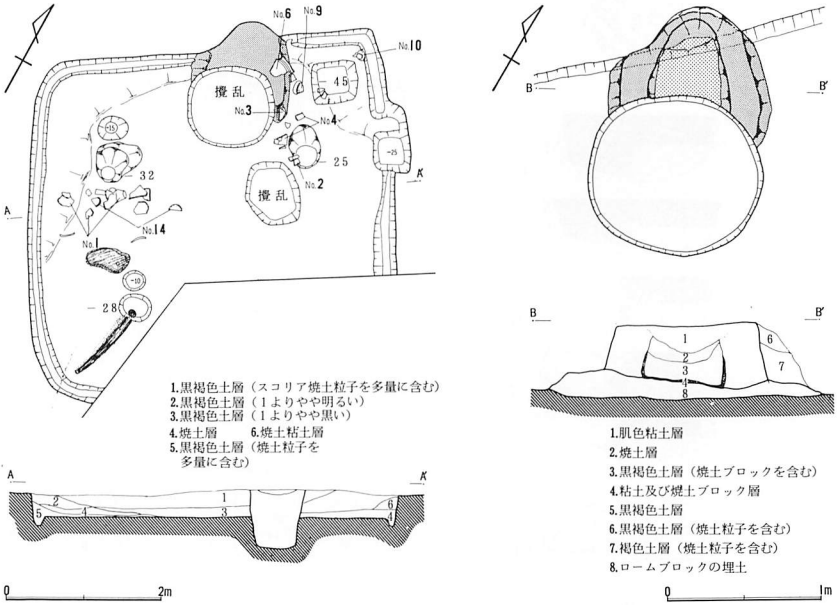
後期の10号住に一部切られているが、平面形は隅丸方形をなすとみられ、周溝が巡る。西壁の両隅にある２本（深さ35・38cm）が主柱穴の一翼となろう。地床炉（F1）はやや西壁寄りに位置し、近くに薄く小さい焼土面（F2～3）がのこる。甕の胴部片やＳ字状口縁の台付甕片など前期の五領式とみられる土師器の小片が出土した（文献44）。

滝遺跡第８次10号住居跡（第６－15図）

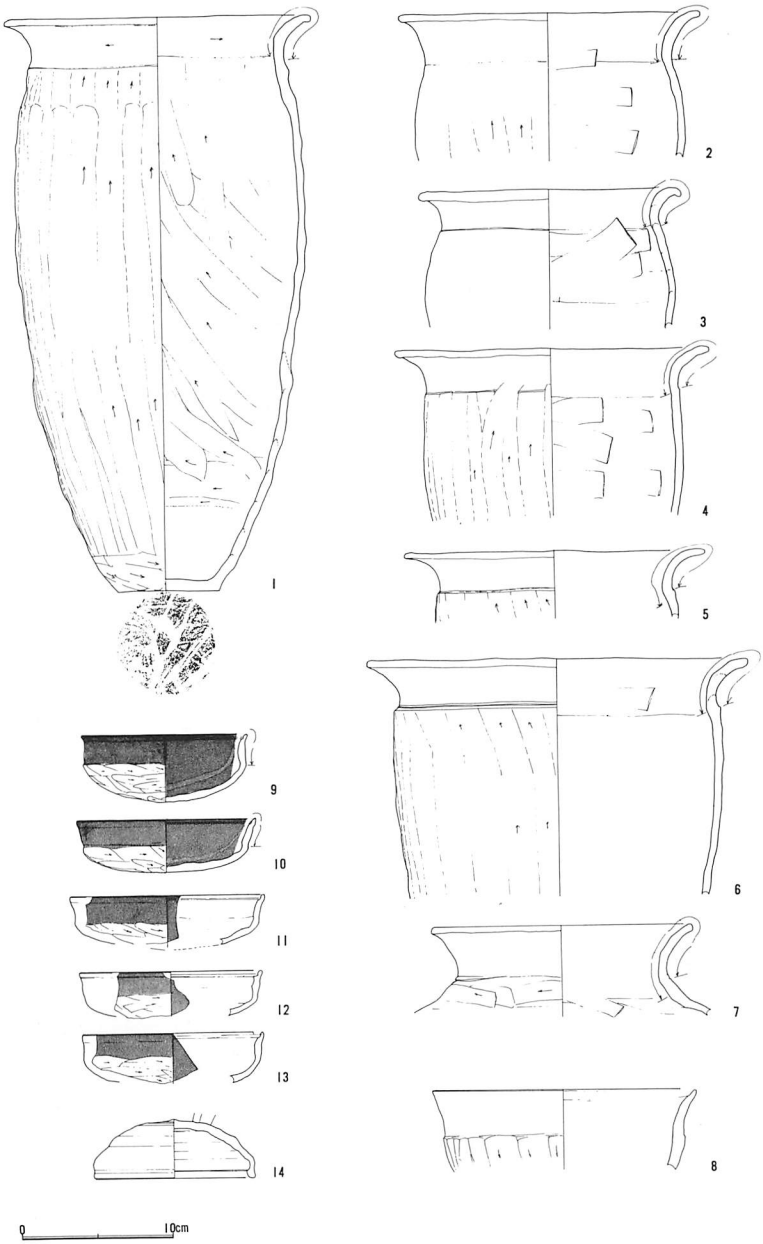
前期の９号住を一部切り、また平安時代の土坑３や後世の井戸が重複している。平面形は正方形に近く、周溝が巡り、整った４本主柱穴（P1～P4）の配置をみる。北東壁に付設されたカマドは、地山を削り残した両袖を具え、



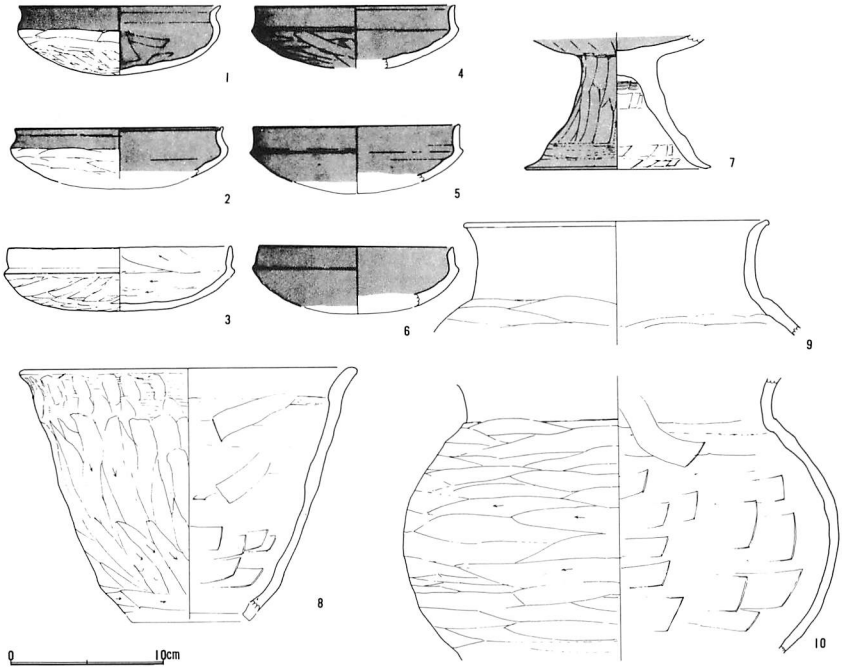
第６－12図　滝遺跡第２次・11次遺構配置図〈１／500〉



第６－13図　滝遺跡第２次２号住居跡〈１／100・１／50〉



第６－14図　滝遺跡第２次２号住居跡出土土器〈１／５〉



第６－16図　滝遺跡第８次10号住居跡出土土器〈１／５〉

皿状の燃焼部に粘土製の円柱状支脚を置き、煙道部も認められた。その右脇には方形でテラスをもつ深さ35cmほどの貯蔵穴を設けてある（文献44）。

出土した土師器（第６－16図）は後期の鬼高式（６世紀後半）に属する。１～６は坏で、うち３が内外面黒色を帯びているほかは、赤彩が認められる。７は高坏の脚部で赤彩が施され、８は蒸し器である甑（こしき）、９・10は丸甕である。

（４）飛鳥・奈良・平安時代の集落

滝遺跡第２次３号住居跡（第６－17図）

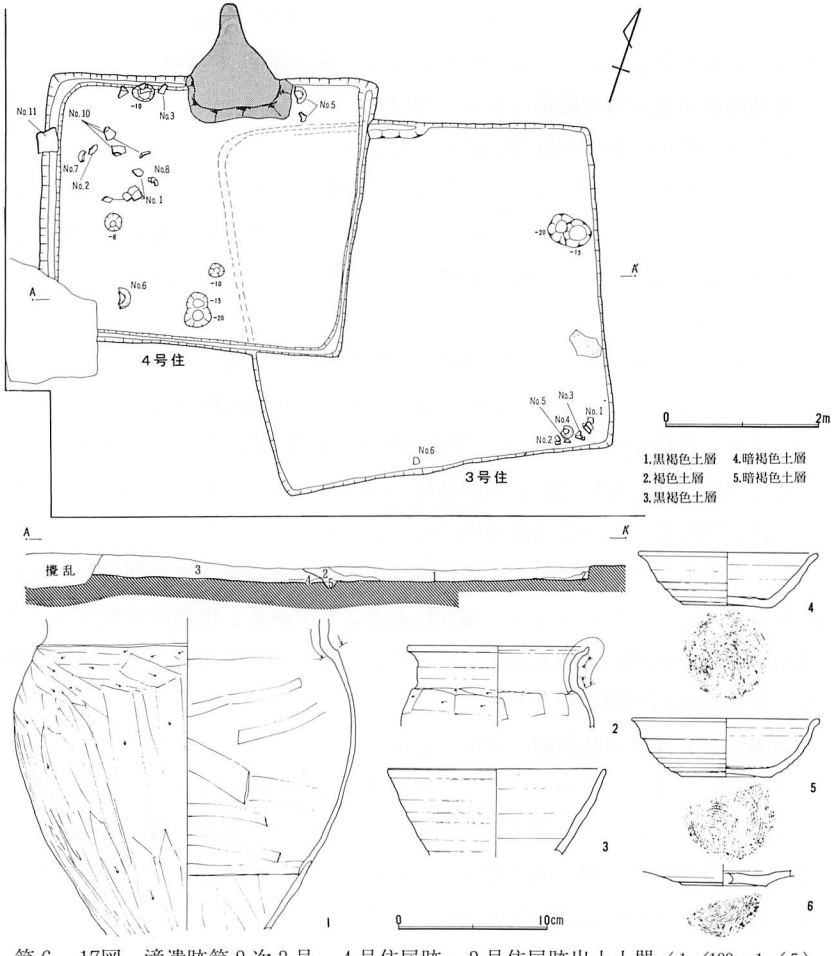
４号住居跡と重複している。東西４ｍ80、南北４ｍ60のややいびつな方形の住居。南側２／３は黒色土層中に構築されたものである。周溝は北側と４号住居跡の床面に一部みられたのみである。床面は非常に良好に踏み固められていた。東側には粘土と焼土がブロックを形成していたが、カマド特有の掘り込みや燃焼部が欠如していたため、カマドとは断定できなかった（文献

38)。

出土遺物（第６－17図）は、土師器甕（１）、小形台付甕（２）、須恵器埦（３）、下半部にロクロ痕が強い須恵器坏（４～６）などである。住居の所属時期は出土土器から９世紀第３四半期と考えられる。

滝遺跡第２次４号住居跡（第６－17図）

３号住居跡と重複している。南北は３ｍ40、東西辺は、北側が４ｍ15、南



第６－17図　滝遺跡第２次３号・４号住居跡、３号住居跡出土土器〈１／100・１／５〉

側が３ｍ80である。周溝はカマド部分以外は全周している。床面はほぼ水平で、カマド前面が良好に踏み固められていた。床面にてピットが５基見つかったが、主柱穴と断定できるものはない。カマドは北壁に設けられている（文献38）。

出土遺物（第６－18図）は相模（さがみ）型甕の胴部（１）、土師器坏（２）、相模型坏（３・４）、底部静止糸切りで周辺部手持ちヘラ削りの須恵器坏（５）、回転ヘラ削りの須恵器坏（６・７）、外面に自然釉がかかる（内面には見られない）須恵器コップ形土器（10）などである。住居の時期は、出土土器の年代から８世紀第３四半期の後半から第４四半期の前半と思われる。

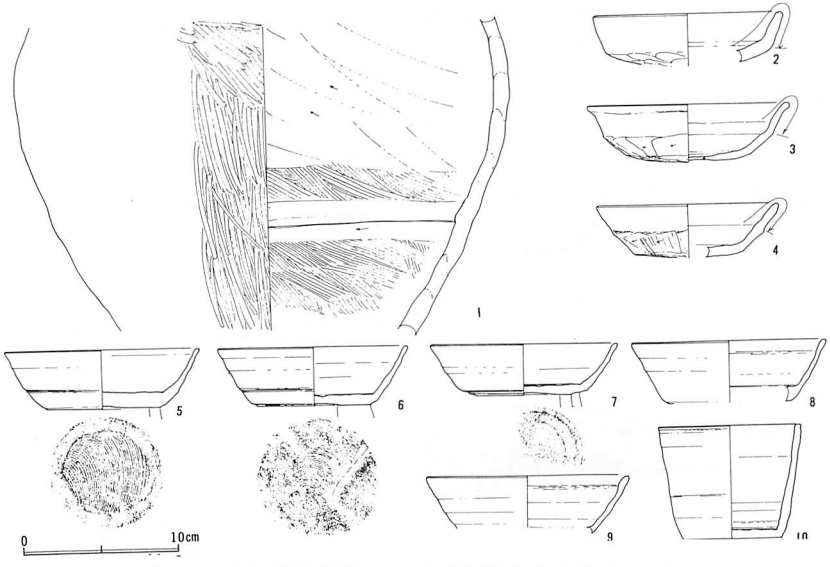
滝遺跡第２次５号住居跡（第６－19図）

調査区の関係で全体の確認には至らなかったが、１辺６ｍ10の正方形になるものと思われる。周溝は全周するものと推察される。床面は非常に良好に踏み固められていた。主柱穴は確認できなかった。床面下を精査した結果、掘り方が南壁直下を除いて楕円形にドーナツ状にめぐっていることが分かった（文献38）。

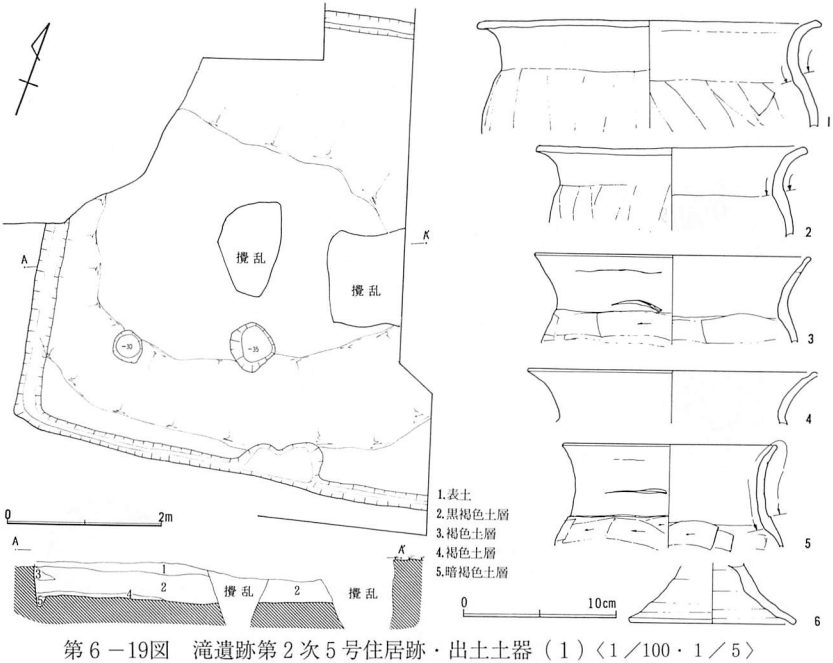
出土遺物（第６－19～21図）は厚手の鬼高期の土師器甕（１・２）、奈良時代の土師器甕（３～５）、小形台付甕（６）、土師器椀（７）、土師器坏（８・11）、相模型坏（15～22）、須恵器甕の口縁部破片（23）、須恵器蓋（24～27）、須恵器椀（28・29）、須恵器坏（30～51）などである。45は深身でロクロ痕も明瞭なことから常総地域のものと思われる。須恵器坏では白色針状物質を含むものと含まないものの比率は１：３である。この時期以降白色針状物質を含む須恵器は激減する傾向にあるようである。南側に位置する２号住居跡から鬼高期の遺物も混入しているが、須恵器坏の年代から住居の時期は８世紀第３四半期と思われる。

滝遺跡第６次７号住居跡（第６－22図）

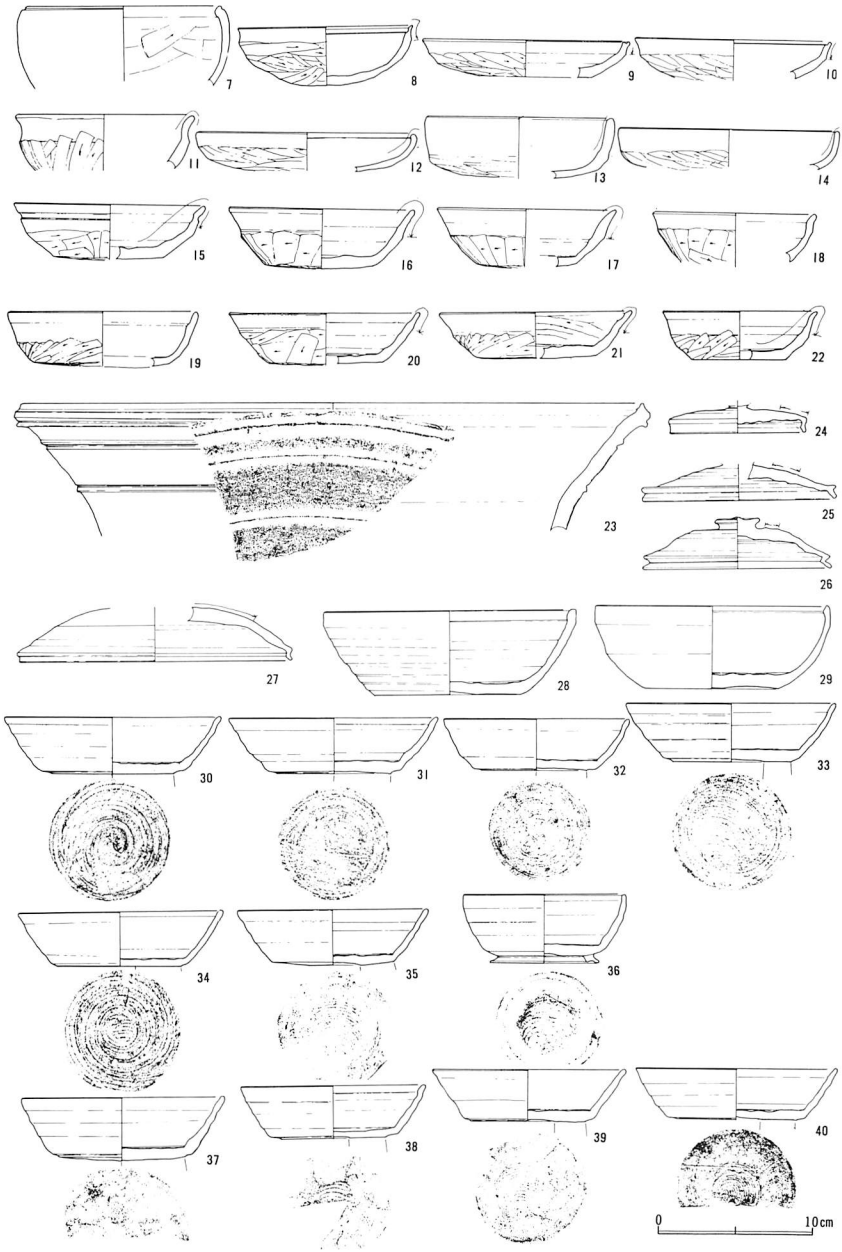
住居全体の１／３強を調査するにとどまった。東西６ｍ20で全体は正方形になるものと思われる。壁下には周溝がめぐり、カマドの両側で収結している。床面は平坦で一様に堅く踏みしめられていた。また、竪穴内の西北隅には、貯蔵穴と思われる浅い坑がある。主柱穴は５本確認されており、カマドも２基構築されていることから、建て替えが少なくとも一回行われたことが



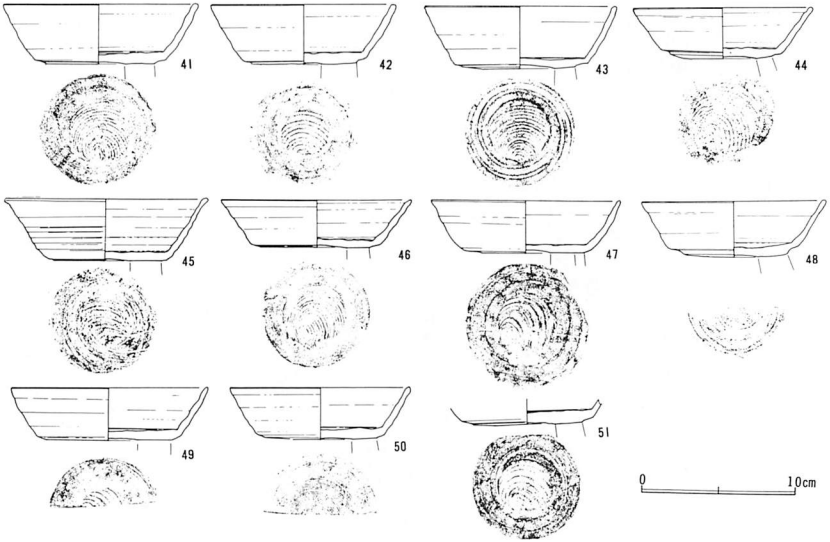
第６－18図　滝遺跡第２次４号住居跡出土土器〈１／５〉



第６－19図　滝遺跡第２次５号住居跡・出土土器（１）〈１／100・１／５〉



第６－20図　滝遺跡第２次５号住居跡出土土器（２）〈１／５〉



第６－21図　滝遺跡第２次５号住居跡出土土器（３）〈１／５〉

考えられる（文献39）。

出土遺物（第６－23図）は、貯蔵穴や住居床面などから土師器甕（１～３）、土師器甕の底部（４・５）、土師器壺（６・７）、土師器壺の底部破片（８）、口径が大きい土師器坏（９～11）、赤彩された土師器坏（13～15）、須恵器壺の破片（18）が出土している。土師器坏は口唇部内面に沈線がめぐるものである。７世紀末頃のものであろう。

滝遺跡第８次土坑２（第６－22・24図上）

長軸75cm、短軸90cm、深さ22cmの楕円形。底面は緩い皿状。北西部分の底面に一部焼土層があり、覆土中にも焼土粒子が多い。出土遺物（第６－25図）はコの字状の外湾の強い土師器甕の破片（１・２）である。特に２は口唇部に指頭圧痕が著しい（文献44）。

滝遺跡第８次土坑３（第６－22・24図下）

10号住居跡の覆土中に重複して存在したものである。推定長軸95cm、短軸65cm、深さ18cmである。土師器甕（第６－25図１～５）が密集して出土しているが、口唇部のつくりには差異が認められる（文献44）。